

昭和十五年一月一日（月） 雪 夜に入りて晴る。【昭和十五年元旦】

暮中ずーと晴天續きだったのでせめて元旦だけでも壯觀に降ればいいかなと思っていたがひょいと起きてみると向こうの伊藤さんのお庭が見えないくらいにはげしくふっていた。多分去年あんまり降らしすぎたので今年の分が少々少なくなったために最もうまく使おうと考えていた雪の神が、残り少ない雪を二千六百年の劈頭を飾らんと思召して、かくて盛大に降らしなされたのであらう。

舎の楡の森は美しく白い正月の着物を着せられ、平常は平面的な複雑な模様を示しているだけなのに雪の積もった小枝は立体的な錯雑した模様を示している。純白な珊瑚といった趣である。九時一寸過ぎに残舎生一同（田村、山根、渡辺健、塚越、菅沼、川又、竹沢）食堂に会して新年の挨拶を合唱しお雑煮を祝った。式には全員出席した。予科の新年の式は始めてだが案外早く終わってしまった。国歌、勅語それから例のばんざいがあつて十分後で終わったのである。式後皆で手分けで各寮先輩それぞれ年始に出かける。午後は円山方面へスキーに出かける。なあま山ーメツチェンスロープー荒井山と歩いてきた。

舎に来る年始客は左の通り

木村三郎 新潟寮 青年会寄宿舎 巖鷲寮

第三進修學舎 高松正信

一月二日 快晴【奥田先生が凱旋】

九時頃 山根君、越塚さんは手稲へ、田村さんは健さんとゲンチャンへそれぞれ出かける。夜の七時四十四分の汽車で舎の先輩の奥田先生が凱旋さる。

先生を迎えるがために七時頃、亀井先生がお出でになった。十二号室で話していたが時間がおそくなって亀井先生を始め舎生は駄足で駅へ、あまり唐突だったので我々一年生はおいてきぼりを食ってしまった。仕方なしにあとから出かけたが幸ひ汽車が遅延したので間に合った。非常に寒い夜であるにも不拘、宮部先生始め平戸、山口その他の先輩等。非常に盛んな歓迎であつた。

一月三日 小雪【ホームシック】

菅沼さんが急にホームシックになり、明朝の汽車の方が都合がいいのに四時五十五分の急行で急に歸省してしまった。ちらほらと雪が降ってゐる。元旦が雪のおかげでやっとならしくなつてゐる。

一月四日 小雪

朝から夜迄平凡な冬の日なり。

一月五日 【馬櫓にゆられて】

朝、田村さん、山根さん、健さん、塚越さんと共に幌見峠へスキーに出かける。山根さん、塚越さん途中で引返した。某君幌見を下るとき足をひどく捻挫し馬櫓にゆられて悄然と下山した。

一月六日 晴

よく晴れた日が續く。もっともっと雪が降ってくれればいいと思ふに。

一月七日 快晴

午後七時三十四分の列車で玉山さんが歸舎された。帯広の方は寒いばかりで雪がまるっきりないとの事。健さん、山根さん、塚越さん三君は円山方面にスキーに出かけた。

一月八日 晴

夕方三木さんが歸舎さる。蓄音器のゼンマイが切れる。

一月九日 吹雪【山の魅力】

健さん等の一行はゲンチャン方面にスキーに出かける。かなりの吹雪である。遭難しなければいいがと思つてみたが皆無事に歸つてきた。成程近くの山なら是れぐらい吹雪でも大丈夫なものらしい。夜、北大生八人が日高で遭難した旨を耳にした。去年に續いて又々悲惨事。山の魅力それは確かに我々の想像の及ばぬ程大きなものであらう。しかしそれが大なればなるほどもっともっと自然の偉大な感じ、自己の小を想つて慎重を期すべきではないだらうか。山のために死ぬのなら少しも悔しくないと言つたであらう。しかし山を愛して命が了つた方が更にいいにちがいない。

一月十日 雪【遭難の記事】

北大生遭難の記事が新聞に出る。十人人行つた内九人が雪崩にあひ、その内一人が佑け出し得るのだ。絶望なのは八人である。死んで行つた人はそれでいいかもしれぬ。しかし社会はこれを何と見るであらうか。

一月十一日 大雪

蓄音器をとり雪をついて出かけたのに、そして昨日迄に出来ると云はれたのに、未だ出来ていなかった。しゃくにさわつた。

一月十二日 晴

一月十三日 曇後雪

山根さんが山から歸つて来た。太田君も河口さんも歸舎さる。皆んな素晴しくものを見、経験して来たんだといった顔つきである。映画『陰流』を見にゆくもの多し。見た後で見てよかつたと思ふ映画である。富豪の悩み的一端をのぞき得る気がした。そしてそれに対する鋭い批判である。

一月十四日 晴

夜、平山、柳川、両御大及び少しおくれて三宅さんが歸舎さる。非常に寒い夜であつた。菅沼さんも歸舎。 一日～十四日 竹沢

一月十五日 【土井恒喜さんが舎に】

休暇中の淋しさに引換えへ、今日は非常ににぎやかだ。午前六時の温度零下二十何度、寒い筈だ。部屋の中の水入れに厚い氷が張つてゐ、河口、三宅両君と小生は藻岩山に行く。三木君も後から藻岩、幌見方面へ。夕方舎の記念祭歌を作られた土井恒喜さんが舎に遊びに来られ、一緒に夕食のライスカレーを食べて行かれた。阿部内閣總辭職の後を受けて大命米内大將に降下。早速組閣に準備中とある。静岡市大火の由、詳細不明。ペテガリ遭難者のうち、一昨日渡辺氏の死体発見したが、今日は葛西氏の死体及他の小品を発見したと

のこと。

一月十六日 【静岡の大火】

昨日と同様非常な寒さである。静岡の大火、十五時間にわたり猛威をふるひ、六千五百戸を焼き午前三時鎮火。非常時柄莫大なる損失を憐むと云ふよりは更に有事の際を考へ寒心にたへない次第である。夜はコンパあり。盛会らしかった。風邪の爲の欠席は残念である。

(田村)

一月十七日 晴 水曜日【善處を期待するだけ】

平山副舎長風邪にて学校を休む。昨夜の外出の為らしい。此の外出も昨夜のコンパの材料集めであったのであるから我々一同大いに感謝しなければならない。昨日藤原予科主事の御別れのあいさつがあった。余り近く接したことはなかったがやはり別離はさびしいものだ。講堂を出て行く先生を見たときは目頭が熱くなるのをおぼえた。米内内閣成立我々は彼等の善處を期待するだけだ。此の様な息づまる様な不安を除いて雄々しい建設の音を聞きたいものだ。

ペテガリの遭難者の死体は戸倉君以外全部発見さる。戸倉君には誠に気の毒だが他の人々が見つかったのは去年に比して非常な幸といはなければなるまい。 塚越

一月十八日 晴 木曜日【休講】

朝日が木の上の雪を眞赤に染め濃艶さをそへた。舎生元気に学校へ行く。学校の授業は先生の都合で大分休講があるらしい。予科生全部は休講を喜ぶ事の半面、授業料のもったいなさ又非常時局に当り一日でも一時間でも一分でも一秒でも早く将来国家を背おふ人物となる基礎をつくらねばならぬにと休講とは余り当事者の責任のうすさをうらむでゐる事と思はれる。世は非常時である！この觀念は何時たりとも忘れてはならないもの。

ふるへ！ふるへ！進め、青年よ！

神の號令は「進め」だ！ (川又)

一月十九日 金曜日 晴後曇【煙突は暖かさう】

舎の屋根から氷柱が長い足を出し始めたので、たたいてこはしたのが二三日前の事であったが、もうすこし長い足を出してぶら下って、外から見てみると煙突の所にたまってゐるのがいつ落ちて来て煙突がこはれるかも知れぬとびくびくしてゐたが、今日屋根の雪を落してゐたので先づ安心した。午後ちらほら雪が降り出したので明日はさぞ快適だらうと思つてゐた所、直にやんで了た。

静かな夜だ。煙突は暖かさうに燃えてゐる。皆さん讀書にでもふけてゐられる事だらう。

廿日 (土)

夕刻近くから猛烈に冷くなり出した。ペテガリに逝ける八名の亡骸が四時七分札幌につく。出迎への人多し。宮部先生も見えられた。 ○○

廿一日 (日)【雪戦】

今日は三學期始つて最初の日曜である。昨夜福本さんが歸舎された。東京の香りを一ぱい身につけて。朝スキーに行かうと思つたが雪が降らずパンパンどころかカンカンなので止

めて札幌一中へ雪戦を見に出く。流石に雪國だけあって雪で巧妙に塔や防壘が築いてある。いよいよ南北に分れて開始ポカポカといふ物凄いなぐり合いである。将来重要な働きをするであらう頭や顔をなぐる音が手に取る様に聞える。東京辺の中學校ではなぐってはならない事になってゐるのに流石は野蠻である。又あんな防壘位何も雪で作って寒い時にやらなくても何でも出来さうであるが、やはり冬の運動といふ点に價值があるのであらう。この辺では腰かけや自轉車の上に立って危っかしく見なくても、角砂糖を拡大した様な雪を持って来てそれを台にしてゐる。中々氣が利いてゐる。青空に万國旗がはたはたとして如何にも長閑さうであるが体が凍りさうに冷く、足の裏がつめたくなくて東京辺でのんびりと秋晴れの日に小學校の運動会を見てゐる様なわけには行かない。

寺田寅彦全集を健さんの個捌の先生から安くゆづってもらった。こんな貴重な物が手に入ったことは舎生大いに喜ぶべきであり大いに利用すべきである。

舎生で今日手稲山へ登った人が二三ゐた。あそこまで上ればいゝ雪があるだらう。

一日中齒痛に悩まされよく咀嚼出来ず、明日あたり腹をこわすかも知れない。 (齊藤)

一月二十二日 小雪【とめこかし】

この日記も土曜並にウィークデーといっちゃ変だけど、とにかく学校のある日は午前中及午後の食事迄は一同学校にて猛勉でちとらもさっぱり書く材料がない。そこで当然夜の世界を書くことゝならざるを得ないし、僕はあまり夜は活躍しないしニュースも入ってくる諜報部も持たないし、創作ニュースもどうかと思ふと、つい人の事などちつとも書けなくなる結果この頁を自分のことばかりでうめざるを得なくなる。しかし日記は自分のものには自分の事をかけばいいし舎の日記は舎の事、勿論自分も舎の一人なり。一を書くのがいいかたまには面白い自分の感想もかいてもいいと思ふ。即ち自分の言はんと欲することは舎にとっておく日記として書くこと。それには自分の日記も大いにかんげいされてもよからうといふこと。でも頁をくふと感心しないから要領よくかく必要がある。

とめこかし梅さかりなるわが宿を疎きも人はをりにこそよれ

一・平井記・一 (西行法師)

欄外に

新しい歌をよりよい歌を君学のためのために、

作り度いこの世にこそ彼の天国を築きたいのだ

—ハイネー—

一月二十三日 火【期待するのは君達だけ】

藤原主事が離札される。正しくは前主事と書くべきだ。御在任中には我々は先生に対して随分やんちゃを言ったが、そのやんちゃをさせて下さったのも先生だからであった事が今頃解る。先生お別れに仰言った“日本が我々が期待するのは君達だけなのだから・・・”意味解ります。よく解ります。もっと仰言やりたかたのでせうがあの際御出来にならなかつた。ですがその御言葉がどの位深刻か、よく解った積もりです。御心残りなく。御期待に耐へようと思ひます。御丈夫で。

決算、79銭 休暇中残留組の方には御気の毒 福本

一月二十四日 水曜日 曇

三年生のスキー教練。奥田先輩歓迎会の委員は忙しい。本日の授業は二時間だった。よく消えることは嬉しい。川又君は張切ってゐるが休講の嬉しいのは心の底の気持だ。他に変わったことなし。 河辺

一月廿五日（木）晴【山の子達に幸あれ】

よくも毎日雪が降らないものだ。全く町は春先の様。予科生諸君も勉強が出来てよからうと思つてゐる。山根君のお父様がかへりに**依**られたとか。道演で今日は映畫かな。

この一週間山で死んだ友達の葬式等で何事もする事が出来なかつた。

今日は葛西君の遺骨が故山にかへられた。遺骨の**傍**に飾つてあるピッケル、山岳部の旗でまいた寫眞、すべて思ひ出の程である。彼の死が急であつたせい学校等でも「やあー」といつて出てくる様な気がしてならない。而し彼等もこの苦惱日本の社会にたゞずして幸福な学生生活で世を去つたから幸福といふべきかも知れない。

而し、残された者の悲は更にその事程よりも大であらう。

八名の若く死せる山の子達に幸あれ。 「柳川」

一月廿六日 金曜日 晴天【奥田先輩の歓迎會】

近来に珍しい寒さである。零下10度はあろう。四時間でフリーになる者多し。奥田先輩の歓迎會の準備で忙しい。我々二年生は全部委員なり。五時半より晚餐がはじまる。純日本式料理なり。ウナギは山河の珍味とか。残念ながら小生の性に会はず。奥田先輩の陣中感想あり。興味深く拝聴する。夕食後コンパに續く。盛大な歓迎會であつた事を皆様に感謝する。出席者左の如し。

宮部先生、奥田先輩、青木、北村、亀井、逢坂、鈴木、広瀬、今井、笹部、平戸各先輩。

十一時頃終了 三木

一月廿七日 土曜日【詩の町、歌の街】

雪の少い土曜日はスキーに行く者も少く一年生と太田、菅沼の両君が連れ立って幌見峠へ行った外は誰もスキーに行く者が無い。曾つては珍しかった冬の青空も今年は毎日のように見られる。でもすみきつた寒夜の星、淋しく行く橇音、エキゾチックな冬枯れのポプラ並木、冬の札幌も亦詩の町、歌の街である。

一月廿八日 日曜日【春香山登山】

天気晴朗。福本、三宅、山根、斉藤、太田の五名春香山登山を行ふ。白樺の林を横ぎり亦タンネの間を縫つて登る、頂上のゲレンデにて猛練習をする。夕五時歸舎。玉山、平山両君もまたスキーを楽しむに円山へ行かれし様である。夜雪が音もなく降り。雪の小止みに雲のヴェールを通し月がかすんでゐた。 太田記

一月二十九日（月）

平凡な冬の日。欧州の戦局未だ少しも展開せず。**淺間丸**事件も英国にかもられた形。新支那中央政權に帝国は絶大な支持をあたへるとの事。大阪にてガソリンカーの事故で二百

名惨死す。 玉山

一月三十一日（水）曇。【木ト（祈祷）】

幾分暖い夜に入り急に久し振りの大雪を持った。此の調子なら次の日曜はスキーにもってこいになりさうだ。 山根

平山さん十二時頃から木ト（祈祷）を始めた。どもちとあやしい。今日の晝食はナットウ。夜はオデン。大阪発の報知では電気廳及発送電の電力統制でもめてる。ふれよ雨、おいらの機械をはたらかせ。六十余年振りとかで一月の降雨量零、全くおどろいた。せいぜい三十耗位ふってくれてもよいものを。オヤスミ。

二月一日（木）曇り

昨日の如く今日も過ぎたやうに明日も今日のように過ぎてもらいたくはない。一昨日も昨日も今日も電燈は十時過ぎになるとちよつと消えた……。何を意味するかだ。昨日には一昨日のことを思ひ出し、今日には昨日の事を思ひ出す。そこで始めて今日は明日の事を豫想し得るのだ。歴史は繰返されると云ふ、しかし此の歴史（も未来の事ではない過去の事である。記録といふものはあるんだ）を正しく讀むといふ事は吾人にとってはひじやうな難しい事だ。然して此の歴史を眞に正しく讀み得た人にして始めて事は成し得るんだ。そこで吾人は安心して生存し得るんだ。 菅沼

二月二日 晴 金【櫓の音のメ切】

櫓の音のメ切がせまってくるので、みな一様にピッチをあげて書くことかくこと。紙をとりにくる者、もう書き上げて出しにくるもの。舎の一同が元気に動いてゐる様が如実に感じられる。もうかなり原稿も集った。寫真も柳川さんから四枚出た。他の人も出してくれる筈。快作が現れることを切に期待してゐる。 竹沢

二月四日（日）曇

と石岳に行く者多し。平山さんは春香に、小生は山根、平井両君や親戚の者と一緒に幌見に行く。雪質よく快適だった。福本さんは無意根に、舎に残る者殆どなし。

二月五日（月）曇

常の如く授業あつて舎に帰つたとたん小生ガラスをつきやぶつて手をけがする。平山さん今日もゲンちゃんへ、結構な御身分といふべし。櫓の音原稿メ切日にもかゝらず文藝部に集る原稿少し。これはどうしたことか、明日も休みなので夜舎に居残る者少し、太田君明日の支度に〇〇らしい。

二月六日（火）曇 大學開學記念日

恒例の手稲山登學は一行十二名に三人の舎友が加はるにぎやかさであつた。出発七時九分の汽車。朝は六時より大騒ぎをして用意した。九時半ヒュッテ着、例年より相当速い由、皆の健脚を謝す。

十時登行を始め、福本、三宅、山根の諸君ラッセルを努む。十二時頂上、萬歳三唱、宮部舎長の八十一歳の寿を祝し益々ご健勝ならんことを祈る。

降りは一騎當千のつわものどもはやばやと特意の技にて滑降する。田村君先頭に馳る姿は

あざやかであった。始めて登山せし平井、川辺の両君山の偉なのに感激す。

渺したる哉天地、悠したる哉古今、必しと感ぜらる。

O Nature ! or what is Nature? Ha! why do I not name thee (gee) ? Art not then the Living G○○ on God ?

カーライルの言や宣なるかな。 運動部委員 太田記

二月七日（水）【】

朝は割合に気高く少し湿った雪が降って居り晝頃までふり續いた。山根、大田の両君、昨日のパラダイスヒュッテにおき忘れた河辺君の上衣をとりにゆく。幸ひにあつて何より、両君には本当に御苦勞でした。午後一時半より野上氏の文化講演あり、演題は「能とギリシャ劇に就いて」といふので興味深くきかれた 「田村」

二月八日（木）相変らずの天気

「そりのね」原稿メ切、皆大いにはり切つたらしい。早く讀んでみたいものだ。僕は僅か一枚で許してもらった。書けないのだから何ともしようがない。かんべんして下さい。

塚越

二月九日（金）曇晴【ピラミッド】

受験者第二次発表あり。醫類は八倍以上に達したそうな。内地の帝大の醫學部受験者の定員に満たないのに比べておかしくなった。齊藤、河辺、竹沢君十号室で福本御大と昨夜三時迄だべったそうな。熱血漢福本御大の話だからさぞ面白かつたらうと思はれる。何事によらず忠孝の道德にそふ様にその中心目的を忠孝にとる様に行動せよ。そう考えて如何にすればそれを達せられ得るだらうとして行動すれば一番安全で皆日本人は幸福になれると曾我氏修身の時間に眼をぐりぐりやりながら、当然の事を又おさらひした。きたない話だが便所のピラミッド大分話題にのぼる様になった。早く解決せねばなるまいよ。衛生部よガンバッテくれ。 川又記

二月十一日 日曜日 紀元節 晴

二千六百年記念日の日を迎ふ。神武の帝鴻業創立されてより悠久たる年月は流れてこゝに二千六百年の年数を数へにけり。思ふに偉大なる哉。全国民舉げてこの日を奉祝し奉る。今日朝より天気晴朗、春の萌し既にあらはれ、道行く人の足も軽く町は澤山の人々に時ならぬ賑ひを呈した。

小生、九時国民奉祝の時間も夢の中に過し学校の式も参列出来ず誠に申し訳ない事であった。

雪の質悪く遥山登山の人々中止され、又スキーにゆく者少く、日曜といふのに舍は残留する者多し。もうスキーも峠を越した模様か。 三宅記

十二日（月曜日）

春が近い、気温昇り街では到る處の雪が溶け始めた。レーン夫人の言によれば今日はリンカーンのバースデーで米國では學校は休みとの事。それから未だ何かあつて二月は勉強する日はほんとにわずかですと仰言つて居られたが、米國ならずとも、二月も既に半分終る。

實際三月期は短い。 ○ (阿部)

十三日 (火) 【「櫓の音」本日完成】

待望の「櫓の音」本日完成。皆素晴らしい作品ばかりであるが、もう試験も近くなったのでゆっくり読めないのが残念である。明日渡辺さんの送別会があるので夜買い物に出かける。

十四日 (水) 【月次會を兼ねて渡辺さんの送別会】

月次會を兼ねて渡辺さんの送別会があった。

午後六時半、宮部先生、逢坂先生、蠣崎先生、奥田先生、亀井先生、山口先生御出席の下に晚餐を行ひ一年諸君の料理に舌づつみをうった。食後直に月次会を行ひ一年二年三年各代表其他の渡辺さんへの送別の辞あり。山口先生、奥田先生、亀井先生こもごも立ち操さんの前途の多幸を希まれ、次で蠣崎先生立ち頗る勢のある雄辯にて寄宿の創設よりときおこし寄宿舎丸の洋々たる大海への進行につき、敬上愛下並に絶対價の信念の二つを以て傳統にさをさしてゆくべきことをのべられ、森、石澤両先輩の偉業につき、はじめて舎生の前に事の意味の重且大にして感謝すべき所を説き舎生一同、しはぶき一つせず身をのり出し、あごをつき出して傾聴した。次で平山さんが三たび副舎長におされ舎生一同心からよろこび且共力を誓った。茶菓の時には奥田先生の質問により現代社会における種々のことからお及現今の学生のあまりに多方面に心をむけることなどにつき昔の先生の時のお話に面白く耳をかたむけた。紙上より再び操さんに心から前途の多幸をお祈りして筆を擱く。

平井

二月二十二日 水【自分自身に破れた形】

昨晚、決算を済ました。一日の食費六二銭であつて全部で二十六円九十二銭。石炭を入れるとどうしても下宿料は三十三、四円であるといふ近頃には食事部としていゝ出来であると思ふ。少しでも台所に気をかけた甲斐があつたと思つて喜んでゐる。

かういふ事を舎の正史としての記録に書いていつかは知らないが舎の生活上の一事実としてこゝに去る者の言葉を書かして戴きたい。大學は又は実科を卒業する迄、終を全うして、舎に終始するのがこの舎の原則であり理想であり、さうなくては舎の實際も精神も高く堅きを得ない。今もそう固く信じてゐる。舎の精神といふ物は舎生の成長と發展と共に展開し、体得し得る物であつて諸君が舎の精神を低いものと思ひ、己れと不調和なるものと思ひ、不完全な物としか取り得ない時は諸君自身の成長が低く發展が^{いまだ}猶しく、舎の調和を展開せしめ得ないからである。さう考へる事は誰の場合にも間違ひでない。この様なcompactな寄宿舎では舎生各一人の眞剣な反省と自覚を動きかけが寄宿舎の精神的存在そのものゝそれと容易に一致し得る。この事はこの舎に一年長く居れば一年だけ余計にそれだけ深く体で理解して行く事柄であらう。・・・然し僕は今この寄宿舎を謂はゞ敗残者として去らうとしてゐる。今一步といふ戦に自分自身に破れた形である。決して誇れないぎまでである。諸君は僕を憐んで呉れてもよい、蔑んで呉れても仕方がない。僕は諸君に僕を憐み、蔑むだけの誇のある事を寧ろ強く望む。諸君の誇は僕の敗れた同じ戦の勝利者の誇となつてく

れと強く願ふ。僕は敗れて去るけれども寄宿舎に対する、又舎生のどの一人一人に対する情も全くよいものである事を今は喜ぶ事が出来るだけである。僕は残る人々に何度も心から望むが、どの人も僕のような敗れ方は決してするな。諸君の誇は諸君の内心の悩を苦しんでも克服せよ。一それが外的の悩や不調和も同等に克服するのであるが一僕を憐むその誇を忘れるなど。 福本

二月二十三日 金曜日 曇午後は雪が大部降った【一陽来復】

三学期の試験もあと一週間の後になった。然し今度は近迫しても試験気分にならぬ。範囲も少ないし案外あっさり終りさうである。毎年の如く本年も今や入試シーズンとなり、東京の中等学校などはもう試験を終へてゐる。世の高校受験生も一陽来復とは云へ中々昔に変わらず悩んでゐるらしい。豫科も多数の志願者あり、率は一流高校並である。全く「窄き門」である。 河辺

二月二十四日 土曜日 曇時々小雪

本科は例年なら今日スキー教練がある筈であるが、之は取止めとなり其代り午後、中央講堂で補講があった。 渡辺

二月廿五日 日曜日

馬スキー。宮様スキー大会行はる。山根、福本の両君馬スキーへ行かる。雪盛に降りて冬再び来るの感強し。

二日前の福本君の日記をよむ。何故の敗残者か。僕には分からない、福本、河口、阿部の三君予科終了と共に舎を去らうとの事、三君共夫々の理由、事情があつての事と思ふ。僕は唯、寄宿舎に予科を出て退舎されて行く方々は生活に一ピリオドをつける爲かも知れない、而しそれが常例となつた時の舎を考へると何か心寒いものを感じる。

この寄宿舎は舎生が殆ど全部この舎の存在価値を知つて入舎したのでなく、受動的に入らせられた人の集合である点が、立派な主義思想をもちながら其の構造に弱々しい感じをあたへるのだ。舎の精神にさへ理解して行つたならば、我々の思想が、我々の学門が終る所のないと同じ様に学部とか予科とかのピリオドは舎生活にはないと思ふ。

二年なり三年なり共に暮しながら舎を去つて行く人を見ると其の後の理由は何であらうとも、我々相互の舎に対する愛情理解が足りなかつたのではないかと、淋しい気持におそはれる。

寄宿舎の流は未来永劫に洋々と流れて行く。否、流れしめねばならぬ。而し其處に浮ぶ我々の生活には順風もあり逆風もあるのは致し方のない事かも知れない。

舎を去つて行く方々の御多幸と御健康を祈る。

廿六日【奥田博士執刀】

山根君盲腸の爲、柳外科に入院さる。

余り突然の事故びっくりする。奥田博士執刀の下に手術行はれ至極順調の経過。

夜お見舞にくる。苦しさうだった。福本君、看護の爲病院にとまらる。

春といふに物凄い寒さである。

廿七日【製圖】

山根君の御見舞に行かうと思ったが手術の直後なので見合はず。試験を間近にひかへ製圖に悲叫をあげてゐる者もある様だ。悲壯な顔をしてカラス口を使ってゐる。二年農類は最後の製圖だからホットした事だらう。 三号室

廿八日 曇【大なるものへの未成品たるべく】

病院に山根君を見舞ふ。聖過良好、一日も早く元気になられん事を望む。

今日でいよいよ予科の授業も終了した。今を去る三年前、即ち昭和十二年四月十九日に初めて予科の入口をくぐってからの三年の生活は実に思ひ出多きものであった。予科時代こそ私達が熱と血と意氣とをもって送らねばならぬ有意義な時代である。私は此の三年間常に「小なる完成よりもむしろ大なるものへの未成品たるべく」自覚して努力して来た。しかして其の結果が如何様であったかは別として、私は今私の後から来る皆様に私の三カ年の予科生活を通じての上記のモットーを御送りしたい。

降る雪も重く深夜に涓滴の音さえ聞かれる春近き二月末、再び書きしるす事のなからん此の日記を手にして、何かとりとめもなく三年の寄宿舎生活の思ひ出が浮んで来る。長い間色々と御世話になった寄宿舎の前途を祝福すると共に、在舎生諸君の御健康と御成功を御祈りする次第である。 河口

廿九日【憂鬱症】

有耶無耶 渺々たる哉、天地悠々たる哉、古今北海の山野白銀にうづもれども春は土からかすかに息ぶき始める、なま暖い風が来る・・・

つららのしたゝりが語る、あゝ哀むべしセンチメンタリズムよ！まさに憂鬱症にとりつかれたる也

予科生明日に試験を控ゆ。 四号室 B

南へ汽車が行く、春休みの旅行を思い浮べつゝ

三月一日【三君の御多幸を祈ります】

第何回目かの興亜奉公日なり。試験のため映画に行く人もなく今さら興亜奉公日を思出させるものもなし、戦時下第四年の日本の一姿を示すものか。山根君は非常に元気で安心した。非常に回復が早い。早く手術をしたのもよかった。大學の門には日満兩國旗があった。満州国も建国以来八年をむかへ益々発展しつつあり、東亜の一礎石となって居るのは我々にとっても喜ばしい事である。今度豫科を終了される三君がこの舎を去られると云ふのは誠に残念な事です。熱と血と意氣を以て送らなければならない豫科生活の時にしかこの青年寄宿舎に於ける寄宿舎生活の存在意義がないと萬一考へられる事があつたら、我々はもう一度この青年寄宿舎なるものを考へて見たい。

現在のこの舎生活には可成りの缺点があると思ひます。しかしこの缺点があるからこそ我々はまたそこに意義を見出し見るのであると思ひます。

たとえば小なる完成品はこの現在の舎生活が我々を作らんとして居るとは考へられないのですが、もしそうであってもそれを打破するのが舎生の責務であつて、それ故に舎を見捨

てられる人々の出るのを見ると我々は何となく淋しい氣持になってしまひます。舎にとつても舎生にとつても平凡な生活に何かの変化のあるのは又止むを得ない事であるかもしれない。しかし自分の生活に一轉機を作る爲に退舎せられる人々を見ると、之が例となった時の舎を考へると今迄四十年の傳統が、否むしろ今迄の青年寄宿舍と云ふものの存在が弊履の如くすてられたやうな淋しい又残念なやうな氣がしてならないのです。

しかし舎を去られた方々も又自分の進むべき道に従つて進まれたのだからこの考へは勿論杞憂に過ぎないと思ひます。

三君の御多幸を祈ります。 玉山

三月二日

予科生毎日の努力御苦勞さん。菅沼

三月三日（日）

桃の節句しかも日曜だといふのに試験試験試験で予科生始め実科も角帽も青息吐息の呈。

平凡な試験の風景である。 竹沢

三月四日（月）

後半の第一日、概ねむづかしい學課が今日で終つたので皆一息ついた形。 竹沢

三月五日（火）【九分行って中ばと思へ】

明日で試験は終りだと思ふと今迄はりきつてみた氣分が少しゆるむ。九分行って中ばと思への諺通り今やっと半分の氣持でゆかねばならないのだが、どうももう五分の四すんだと思ふとどうしても半分とは思へない。科学的考へ方に頼りすぎてのためであらうか。

竹沢

山根さんは元氣であつた。早くよくなれんことを。

三月六日【晩さん会を天政で】

豫科試験終了。映画に行く者多し。午後四時半より病院山根さんの部屋でコンパを開く。小谷さん見へられ山根さんの病氣のおとなどで話はずんだ。六時よりサヨナラ晩さん会を天政で開く。

三月七日

予科は試験を終つてぼつぼつ帰省する人もあるが割合に皆呑氣にかまへてゐる。舎では今朝九時の急行で齊藤君が歸つた、河口、三宅、渡辺、塚越、三木、菅沼の六君、奥手稲の山家へ出かけた。別にあぶない山でないから心配はいらぬが春先の暖い時機だから、けがでもするやうなことがなければよいが。學部、実科は試験中でおちつかぬ様である。

三月八日

春日遅々たり。河辺、川又の二君朝の急行で帰省さる。山根君の所に電報二通来る。彼も二、三日中に退院の由。

三月九日（土）【「奇せき」？】

我々（河口、三宅、三木、渡辺、菅沼、塚越）奥手稲より無事生還。

歸省するもの阿部芳郎氏。

山根さん退院さる。喜びの極みなり。元気甚だ旺盛にして映画に行きたさう。普通のを何でも食べるといふから青白い顔でおかゆを食べさして貰って居たころのことが夢の様であり「奇せき」？の様な感がする。

兎に角御芽出度い。四〇四病の中一病が減って四〇三病になったことは現在の医学が証明してゐる。然しこれも三百年の後にはうそであることがわかるかも知らない。然し無い所はいくら三百年後でも炎症をおこせないだらう。御目出度う、御目出度う。 塚越

三月十日（日曜日）【今日、腸カタル】

朝から烈風が吹きまくる。三月も半ばといふにひどい天気だ。風の相間相間に鉄砲の音がきかれる。陸軍記念日だ。事変下の記念日一入意義深いものもあり。

河口さん下宿に移る。夜九時帰郷。塚越朝九時張切って帰る。滅多に遅く帰郷した事の無い私なので舎生の一人一人が帰るのを送る度に帰り度くなる。それにつけても山根さんの様に遠い所の人は何んなに僕等より寂しい気持を味はってゐられるかと思はれる。殊に昨日の無理が災いしてか今日、腸カタルとの事、大事なければよいが。げっそりやつれて眠ってゐられる顔を見ると気の毒で仕方がない。山根さん、元気を出して早く健啖振りを發揮して下さい。 三宅

三月十日 月

健君と三宅君帰省

十二日 火

朝から雪が降る。雨になりさうでならない。つらゝが皆落ちて春になる。山根君殆どよい。菅沼君が帰る。学部、試験の皆終った人、まだの人。

頻々として火事多し。用心用心。

十三日 水

予科成績発表 舎生一同無事息災。やれ。

「格子なき牢獄」鑑賞。

山根君のお母様お到きになる。

夜荒れ模様、春の嵐、これが二、三日狂った後に春が訪れるか。

十五日

予科終了式

十六日

朝の急行にて山根君、母君と、平山さん出発。夜鈍行にて田村さん離札。

十七日

玉山さん御親戚へ

十八日

福本離札。舎空っぽ。

二十五日

夕刻、山根帰札

四月三日 曇 夜に入り雨交りの小雪降る、温し。【入舎に就いて】

午前、吉沢氏夫人来舎され細田君の入舎について種々御話する。未決定。街には新角の姿がそろそろ見え初めた。僕も初被りをして友人と松竹へ。ストーブが消えたので寝る。

四月四日 【入舎に就いて】

昨日から降り出した雪は本日一日中降り續いて遂に七八寸の積雪を見たり。街路樹に積りたる雪は重たげに枝を撓ませ真冬の再来を思はせり。

午後青木氏来舎され予科二年持月君と四高出身の採鉱一年目春日君の入舎に就いて種々御質問あったり。

四月五日 快晴 【愛馬週間】

降り積った雪にキラキラと暖い日光が反射して眩いばかり。本日から愛馬週間。円井に馬車展覧會を見る。夜は昨日より気温下り雪解道はカンカンに氷ついてゐる。窓を明けて寒天を仰げば星満天。明日も晴天ならん。

四月六日 晴【新丸を迎える】

雪が溶けて道が大変だ。朝三宅君帰舎。阿部君帰舎、夜は外泊さる。夜行にて舎生を迎えんとするも一名も来らず。新丸を迎える應援団の怒声、驛を震撼せしむ。

四月八日 戸田君入舎

四月九日 三村君入舎。夜七時より歓迎コンパ五号室に行はる。

四月十日 【部屋の引越】

部屋の引越行はれる。夜、両君と一緒に椅子など買いに出掛ける。帰札以来連日の悪天氣に少々くさる。雪、雨、みぞれの連続には全くへいかうした。

降雪と雪どけで道の悪いこと甚しい。阿部、河口の両新角、少時舎に来られる。夜は殆ど全舎生外出。 渡辺

四月十二日 金 快晴 永らく續いた悪天候止みたり。【藻岩へ行き給へ】

午後、藻岩山へ春山スキーの妙味を満喫すべく出掛ける。頂上で裸スキーを行ふを得たり。今日はそれ程暖、無風なりき。東のかた大雪、十勝、日高の連峰遥かにかすむ。南には恵庭聳え、樽前の噴煙悠々たり。札幌、空沼の両嶽未だ冬眠覚めずや。

札幌の近くにかゝる眺望所あるを喜ぶ。

諸志よ閑あるの時、藻岩へ行き給へ。 (大田記)

四月十三日 (土) 快晴【自己を築くべく努力せよ】

東京からまひもどってみると海は荒れ雪はふつてゐる。お花見も一應すませてきたといふのに、これは又何といふ異り方であらう。熱力学の方則が逆の方に働いてゐるのぢやないかと疑はれる。春夏秋冬と小学校以来習ひ憶えてきた大原則がくつがへされたのかと思ひ惑ふくらひである。がそれもほんの二三日で、幸ひ昨日今日は春らしい陽ざしで冬も一段落をつげた様である。側を通る市電の車の音も軽やかにきこえる。空は青空、雪もとけてもうわづか日陰にのこつてゐるくらひである。

色々な点に大きな期待を持って新入舎生がやって来た。君等には寄宿舍に対しても何か期

する所があるにちがひない。しかし私は云ふ。常に自己を満足させうる唯一のものは、それは自己以外にないと。他人に頼りすぎるな。自己を築くべく努力せよ。他人は自己といふ絶対者に対する一つのそへものにしかすぎないのである。同様なことが學校に対しても云ひうる。學校の良否は第二である。それを云々する前に自分がそんな外的条件にほとんど左右されないだけの実力を養う。外的条件が自己に及ぼす影響はわづかでありうるのだ。
(竹沢)

四月十四日

朝から曇天のはっきりしない天候だった。

三宅君他数名の計畫した手稲行きは中止され、代りに藻岩へスキーに出掛けた。夕方細田君入舎。玉山君夜帰舎。

四月十五日 暖い晴天【足が地につかない】

気持ちが浮き浮きして心が落つかない様な感じがする。ポーとして足が地につかない様にも思はれるし、大地を踏んでもふみごたいしない様な感じの日だった。漱石か誰かの「總てのものが霞の中にとけこんでしまった様な感じ」といふのは今日の様な感じではないだらうか。此の様な日には慾も得も名譽も恥も何もかも忘れ去って、のこったものは美しいのかさわやかなのかわからない霞の様な感じだ。

夕飯後久し振りで野球をしポプラ並木を散歩してみた。

春宵一刻値千金唯一人書讀亦不快哉。春宵の一刻に書讀む價は二千金位のものだらう。

この春この時に新入生諸君始め大いに學問をしようではないか、眞の學問を。

塚越鈍才

昭和15年・成田氏担当

四月十六日

日誌をまはすのを忘れてしまったから今日も書きます。お許し下さい。夜の急行で平山副会長着。菅招君歸舎。

夜平山さんを前において大いに寄宿舎改革を論ず。平山さんたちたぢとなりながらも嬉しさう。誰だって悪い気はしまい。寄宿舎の底に流れるあるものがはち切れる様な躍動を始める日も近いことだらう。
塚越

四月十七日

青々とした空の良い天気であった。午後は櫻星会入会式等で授業はない。思へば去年のその日の感激がまざまざと思ひ起され、白馬の隙のたとへ、人生五十年の行く命の早きを思ひ出し、人の命など考えて居れない。一日も早く自己を完成さすに、理想を高く持ち、努力をせねばならない。

午後野球。キネマ等思い思いに若人の心を張る。せい出してそよげ若竹今のうち。

四月十八日 木曜日 晴 ぽかぽかと暖かかった一日

〇〇の本年度委員選挙に於て、幸い僕らの提出した委員選挙ノ法改正案が認められて、
〇よ、全舎生が或部の部員としてその部の〇〇は勿論舎の〇めに〇が出来るようになった。少数制訓より、全体制の移った譯だ。各人各様の抱負もあるかと思ふから、どうどう提案して実行することだ。今後の舎生の積極的活動の前途洋洋たり、全力をあげて共に進まう。小生も運動部〇員として大いにやる。

新入生の入舎を共に近来稀な猛練習、殊に新入舎生の進出目醒し、對巖驚寮、對莊内寮の〇舎も近く行ふ予定。舎生諸君、大いに頑張ってください。

春、小生ぽかんとして、洗面所に時計忘れ〇動へ。

ミヤケ

四月十九日（金）

朝から陰鬱な天気だ。東京に居て「北海道」といふと誰もが先ず想像するであろう様な冷い浅春の空である。

新制度になる委員達は夫々自己の抱負を今や実行に移さんとして張切っている。しかしこの制度は、自分は他の部には関係してゐないからと言って、それに対する関心を失ふ様では大きな誤解である。舎生は全員運動部員であり、文藝部員であり、食事部員であり、衛生部員であり。本員は文字通り委員であつて、唯、部員の先に立つて行ふと言ふだけである。我々は委員であつて唯、部員の先に立つて行ふと言ふだけである。我々は委員でこそないが、すべての部の部員である事を心掛けてゐなければならない。

北國にも今や運動シーズンがやって来た。對寮マッチも近くあるとの事。舎生一同猛練習を重ねるが、大学のグラウンドへ行って狭い寄宿舎のテニスコートでは出来ない技術の練習、即ち強襲ゴロの受止、大フライの落下位置の目測などに熟練する必要があるはしないか。それに加ふるに我等の燃ゆるが如きファイトと作戦の妙とを以つてすれば必ず勝てる。そして比較的予習の暇な新學期の春宵を讀書に議論に、研究に有意義に過せうではないか。 小林君入舎さる。 (斎藤)

四月二十日（土）

快晴。大分春らしくなってきた。中島公園に行ったり山へ行ったりする者 あり。小生乗〇練習なり。 ○○○○ あ

四月二十一日（日）

朝より日本晴れである。三宅・塚起・渡辺・三木・戸田の五君と自分は、春の手稲 山に登った。割に良く滑れたので面白かった。冬の気分に比し、春の気分も又よいし、夏にも登って見たい様だ。行きも歸りも汽車が帰着しなかったら予定のくるふ所だった。これで當分スキーに用はない訳だ。これからは快い北國の春を味わふのだ。

四月二十二日 快晴（日本晴）

札幌の町もやうやく、春らしくなって来た。今頃内地では、もう櫻も散ってしまったらうが、こちらはまだなかなかである。二ヶ月程遅れて春がやって来る。自分の夢みてみた札幌の町とは、まだまだ隔たりがある様に思はれる。五時頃から、野球練習始まる。ボール破損して中止。（三村）夜八号室の戸が開かず成り。三木氏大活躍。菅沼氏風邪の氣味。夜は未に冷え冷えする。札幌の夜に聞く馬の足音。東京の号外に似た鈴の音。

二十三日

病める續出、太田氏入院。日本晴れ風強し（戸田）

二十四日 水曜日晴

本日も依然として風強し。札幌名物の馬糞風だ。今度風邪は随分長びく話だ。舎生に風邪患者多し。菅沼・細田両君、病床にあり。早く全快されるのを祈る次第。（三木）

二十五日 木曜日

細田君 白石病院にさせる。柳川氏九時頃歸舎。

二十六日 金曜日

札幌も春らしくなった。春雨も、しとしとと降ってゐる。若い、青年の意気に燃ゆる、私の様なものも、自然思ひ出の虜となりたがる。幼い頃から、卑俗な市井の中に育った私は、春雨と柳の枝と、三味線の音と、そう言った環境に立って見たい。退嬰的な、頹廢的な、そう言った様な生活から脱け出ようとする、多くの男女が居るかも知れない。だが私には（そう言ふ人々が居ることをも考へずに）思い出の種として、その環境を永久に欲する。

舎生の多くは今日「格子なき牢獄」を見に行きぬ。（望月）

四月二十七日（土） 曇

午後、舎内紅白野球試合する。

太田君非常に元気で、病院生活にも慣れたさうだ。但しエッセンを望する事非常に大なり。

四月二十八日（日） 小雨後晴

折柄の休日も雨たり。明日対莊内寮野球戦を行ふこととの事なり。新入生歓迎会は、五月五日。委員長柳川氏なり。（玉田）

四月二十九日 晴 (月)

犬長の佳節。朝八時より式行はる。午後、対荘内寮野球戦あり。五対二にて惜敗す。

柳川

四月三十日 (火) 晴天

前日からの雨もすっかりはれて、今日は朝から晴天だ。病人は僕一人である。みな学校へ行ってしまった後の静かな寄宿舎の中で、何ともなしに物を考へると、父母の顔や、教師や友達の顔が目の前に浮かんでくる。又ありし日の事が次々に思ひ出される。

ああ缺席日の楽しき事よ。

近くテニスコートを修理するとの掲示あり。

(小林)

○月○日 (○)

細田君一週間振りで退院さる。入學早々○○にも病魔にたたられ御気の毒だったが、ともかく早く退院でき、御目出度いことだ。愈々運動部の活動目ざましくなり今夕よりテニスコート修理にとりかかる。ボールドには、過日対荘内寮戦にて一敗地にまみれた汚辱を○○べく對秋田寮戦に備へて、メンバーが発表されてゐる。頼もしき哉運動部員！必勝を期し全力を擧げて戦はん。

(山根)

五月二日 (木)

今日は生暖かい風が砂塵を卷上げてゐる。處用あつて遅く帰舎すると、殆ど全舎生外出の後であった。新入舎の方々の記を読むと、しみじみと自分の入舎当時のことが思ひ出される。思へば二年間も夢の様に過ぎてしまった。春夏秋冬と四季様々の札幌の自然と人生は、私の魂の故郷である。自我発見への努力の出発点であるのだ。

渡邊 記

五月三日

歓迎会のドサクサの為に、五日分ばかり書くのを忘れてしまった。許して呉れ。この日、庭球コートの新舎生アルバイトあり。

五月四日

柳川さん始め食事部明日の歓迎会をひかいて忙しい。明日の對新か夕寮戦に備へて練習(野球)す。

五月五日

午前中新か夕寮との野球戦に惜敗す。

○○○○より評議員会。五時半より歓迎会。

先生始め出席の先輩(青木・亀井・前川・山口・平戸の諸氏)を我々舎生共に、食事の方

○の作られた料理に舌つづみをうつ。

食○先生が他ノ舎にも出席されねばならず、そのため直ちに月次会にうつる。例に依り例の如く会は進行せり。先生の訓辞につづき、新入舎生の挨拶あり。五君何れも元気に入舎の感想、舎に對する抱負をのべ、我々に多大の感銘を○ふ、つぞ在舎生の歓迎挨拶を行ふ。

健さん、新入舎生の方々の個性の發揮されん事を力説し、ついで菅沼、日頃の信念を吐露し熱ある演説をなし、三木又三木らしい話をなし、最後に三宅 勝手な事をふいて終わる。

先生すぐにむかへの自動なにて退舎さる。又諸先輩の有意義な話をうかがって、一旦月次会を終わる。つぞ漫談にうつり。諸先輩の学生時代の生活をきき、平さんの漫談に抱腹絶倒。時の移るのも忘れる程だった。

三年生 新入生をつれて町に出る。十二時歸舎したら学部のお歴々残飯を整理されてみた。

五月六日 晴たり曇ったり 月

午前三時。“醒めよ迷ひの夢醒めよ”の音頭と共に新入生歓迎大ストームあり。約二十分位暴れてさっと引き上げて寝て了った。

朝飯時、昨夜のストームの話にて賑はふ。大分突然の事とて珍談奇談もあった様だ。平山さん、知らぬが佛でねていたところ二階からたたき落ちて、知らずに朝迄ねてみた珍談の持主。さもあらん事と○肯かされる。

九時半より会會堂にて、文武会歓迎会。

山根さん、四日の夜よりポンゴ痛くしてしくしく泣きながら床の中。すうかりくさってゐる。

三宅

五月七日 火曜日 曇ったり晴たり

文武会のつづき。 午前九時半より中央講堂にて、奥田さんと中谷さんの話あった。舎生さぼるもの、途中にて帰るもの多し。○れ昨夜の返礼ストームのためか。兎に角皆さんねむそうな顔をしておられる。小生も昨夜、白河夜舟の高いびきの所をスキーで頭をぶんなぐられておこされたためか、一昨晚のつかれのためか、一日中ねむかった。

午後、テニスコートにてコートの修理をまちきれず打ちきょうずるもの多し。後刻、アルバイトを行ふ。舎生諸君の献身的努力により、コートの完成も近い。団結力の偉大さを目の前にみて嬉しさにたへざりき。もうひとふんばりだ。がんばって呉れ！ 三宅

五月八日 水 晴、曇半分づつ

三日の休み終わって気の抜けた様に学校にゆく。午前中、風など吹きてそうぞうしかったが、晝からそれもおさまりてうすびさへももれる天気になった。

テニスコートの修理、大半片づく。あとはローラをかけて仕上げにかかるばかり。皆様おまち遠さまでした。

三宅

五月九日 晴 風強し

午後四時太田氏退院。夜、四号室で退院コンペをやる。今日から両国東京大相撲初日である。相撲の話に興ずる者多し。三宅氏相撲ファンで大いに其道の智識をふりまく。

川又

五月十日 晴

札幌にも春来り円山の櫻花は満開。午後授業を消して、三宅・塚越氏櫻見物に行く。晚には平山・健・斉藤・三村・河辺同じく櫻見物へ。夜の櫻も又よき哉。四丁目を經由して歸舎す。三宅運動部長薄別旅行のエッセンを買ひ出しに行く食堂には食物が陳列してある。又テニスコートのアルバイトも大いに捗どり一まず終った形である。旅行から歸ってから、又アルバイト○○○良いコートになりそうだ。明日出発の旅行を想像しつつ○○筆す。

十号室 kawabe

五月十一日 (土)

午後一時、廿五分豊平駅発列車にて○別に向ふ。○別に於けるては、例によって例の如く迎行せり。○三年は○君の悪て○○せじて、夜のふとんむしは特筆大君に値す。

五月十二日

十時頃晝兼食の飯をくひ、定山溪にて水泳をなし、へとへとになり札幌にかへる。夜○○三年目のストーム行はる。

五月十三日 (月)

春の日や、何へもなく暮れにけり。

五月十四日 (火)

寒波襲来！四度、冬に逆もどり。

五月十五日 (水)

麗らふな春の日和。三吉神社のお祭り。

五月十六日 (木) 晴夕刻より風吹出す

本日は學部連農は張り切って、早朝六時半に舎を出発した。作業場は「イチノ沢」驛付

近。初日なので準備に手間取り、作業開始は十二時、終了は予定より早く二時五〇分だった。二十六度の傾斜地を、鎌・ナタ・ノコギリで笹や木の株を伐採して行くのである。北海道開墾当時の屯田兵のことを思ひ出した。独逸は愈々マダノラインを突破して佛領に進入した模様である。

五月十七日（金） 晴後曇

二千六百年を記念した植樹事業第二日目を迎へ、今朝は快晴であった。新芽ほのかに匂ふ五月晴の朝、実に千両万両の気分を味ふ。予定の如く仕事を終へて歸舎したが、学部
の学生がよく働くのに感心させられた。自分の与へられた仕事は、眞面目に遂行して行く。他人に監督されずとも、自分の責任をよく知ってゐるのである。既に社会人の一端を示してゐる如くに思はれる。学問をする者のみが示すことの出来る行為である。我々の労働が数十年後に結ぶ実を、夢に描きつつ、疲れた五体を模へれば、分を待たずして安らげに眠りに入る。

平山生

五月十八日（土曜日） 晴・曇

本日、我々の苦勞が酬われて、テニスコート完成。コート開きをやる。牧笛の原稿、今日でメ切。皆張切って筆を取る。

三村

五月十九日（日曜日） 曇時々しぐれる

柳川さん、菅沼、河辺、三村、戸田諸君と眞駒内に行く計劃で舎を出た時、突然ポツリポツリと降って来て中止する。折角仕度したのだからと言ふので、柳川さんをのぞく他の五名は三角山に登る。頂上からはかすみに包まれた札幌の市街や琴似の方が見渡された。うぐひすの鳴く音が美しく、若葉の緑は一幅の繪だ。熊笹の中をかきわけながらみねづたひに抜跣した。他の方々は専らテニスコートで活躍してゐられた様だ。明日のアルバイトにそなへて夜は早くねる。

渡邊

五月二十日 月

今日よりアルバイト、去年の経験があるので非常に楽だ。唯往復の汽車の「立ん坊」には少々疲れた。

アルバイトから歸へっても元気よく庭球するもの多し。ファイト喜ぶべし。 塚越

五月廿一日

アルバイトの二日目、大分こたえて来た見え、皆ぐったりしてゐる。然し三年生達、狸小路に下りて西へ行ったから、「庭の千草」でも見に行ったか？

今日双葉休場、四敗を横綱の耽として謹慎してゐる。

平井氏、夕方山根氏とキャッチボールに興じてゐた。

物すごい元気である。

三号 Y・K

「こころよき疲れなるかな 息もつかず 仕事をしたる後のこの疲れ」

「はたらけど はたらけど〇わが仕事はかどらず じっと鎌を見る」

五月廿二日（水）

予科二・三年、アルバイト弟三日目、皆元気に出掛ける。若葉は美しい。かんこ鳥も鳴きはじめた。かんこ鳥はよく晴れた日によく鳴く。植物園の若葉の中から園外の寄宿舍迄もすきとほった声をひびかすのである。舎生皆大元気である。 四号室 R・〇〇

五月二十三日

この頃は非常に日が長い。で七時過までテニスをやる連中が続出する。夜決算あり。 玉

五月二十四日

朝自殺あり。斉藤氏、三木氏、小林氏、平山氏等見に行く。浅ましい姿をして居た。子供だとか、十七才だとか、変なウワサ立つ。作業は第二日、サボって働かぬ。夜外出多し。死んだ女のお陰で色々と考へる。男が悪いか、女が悪いか、世間が悪いか、造化の神は不要の人間を作ったのか？

五月二十五日 快晴

實に良い気候となった。植物園のローンの上に寝ていると思はず頭が垂れて夢の世界に遊んでしまふ。札幌も愈々初夏なのだ。夜の月を見ても思索に耽る若人の頬に偉大にして無限なる自然の〇なる誘いに対する感激が浮ぶ。お一自然よ、我等の母なる自然よ。汝は永久に我等が保護者なのだ。土より生まれ、土により〇〇されもして土に還る人の一生を思ふ時、誰か自然に対して感謝。眼を〇つがずにおられるだろうか。自然は絶対にして批評すべきものではない。諸君勉強に疲れた頭を自然に療さん。 平井
追記

舎の大掃除を始めた。猛裂に勇ましく進行して夕食にはすっかり終っていた。但し未だ大半は未〇〇。六月四日迄に皆やること。戸田君昨日今日の植林に白樺の大木をかついで歸舎。大いに青年寄宿舍の名をあぐ。

夕方、山根君、小林君、斉藤君、戸田君、細田君それに僕がテニスに暗くなる迄ふけた。夜蛙とフクロウの音がする。

五月二十六日（日） 快晴

恵迪寮第三十五回記念祭。好天ニ恵マレテ、寮生ノ張切方モ一入。朝十時カラ工学部北ローンニ〇テ運動会ヲ挙行。観家、色トリドリデ華デアル。男ヨリモ女ノ方ガ〇〇〇〇愉快デアル。倣袈行列 借物競争〇〇予科生〇〇蔵〇遺憾ナク發揮シテ傑作続出ス

ル。四時半頃終ワル。

舎デハ、盛大ニテニスガ行ワレル。植物園へ午後ノ一時ニ〇〇〇行ケルモノアリ。
ユカイナ日曜日デアル。 ○〇〇

五月二十七日

今日は海軍記念日。晝休に応援の練習あり。予科・高商何れが勝つか。夕方、河口さんが来て、テニスやキャッチボールをやる。おそくまでテニスをやる者多し。近頃エッセンの質が落ちて来てゐるが、二三ヶ月前の三割位高くなってゐるので我慢せられたい。夜、雨が降り出した。予科二年は明日から島松へ野外教練がある。 (斎藤)

五月二十八日 曇天

予科の二年生が島松に野外教練の〇に出掛けた。昨夜小雨が降ったので道路のほこりもあがらないので気持ちがよい。夕方、四時五十分の列車で縣の先輩の石塚が出征されたので見送った。

五月二十九日

特記すること無し。夕方綺麗に晴れて気持ちよし。植物園の池からは蛙の聲がしきりであり急に吹き入る風にも初夏の香がしてゐる。柔らかな綿に似てのものがおほい晝されてしまった。 夏近し

五月三十日

久方振りに雨降る。手書きさへも心配される折から非常に嬉しい。浮ついてゐた心も落ち着く様だ。自分の事を書くのは変だが僕は少々近次落ちつかなくて困ってゐる。季節の為かも知れないが。(変な噂もあるようだが皆事実無根であるから取り返して下さい) 塚越

五月三十一日 曇天

僕が書くべき時でない時にまはって来たのでどうしようかと思つてゐる内に日が過ぎて四日になってしまった。御許しを乞う。
初夏、何を見てもこの感じだ。蛙、緑、ローン、等にて初夏を象徴しないものはない。札幌では、冬から直接夏になってしまふ様な気がする。芽が出たなど思ふてゐる内に現在の様に物の見事に若葉から大きな葉になってしまひ、枝につけ切ない程多くついてゐる。今にもこぼれそうな威がする。 塚越

六月一日

昨日演習から歸つて来た二年生は、今日は休業である。三年生は、去年休業にならなか

ったと言ひ、不公平だとならず。晝余り晴天でもなかったが、日が暮れると小雨が降り出す。明日の対高商戦に晴ればと、気をもむ。

六月二日（日）曇時々雨降る

予科対高商野球戦、雨のため流れる。実○対抗競技会は雨中にもかかわらず、大熱戦を行ふ。農実優勢。小林君細田君応援に参加。

雨が降ると気が落ち着く。読書は雨の日に佳なり。舎生、皆元気たり。事故無し。（大田）

六月三日（月）

日記の回覧が少し狂って居るやうだ。本日、曇天にも拘はらず大掃除を決行、無事終了した。牧富、今度のは原稿用紙であるせいか、少し感じが違った。字の大きさが同じになるので、一つの作品から、次の作品を切れ目がはっきりしない事が多い。題を書く所を数行位明けるかしなければいけないと思った。

本日の夕食代用食。國家經濟と個人經濟との關係、代用食の○○○。「ぼらのほりかた」及び「待ち」等○題の中心となった。

玉山

六月四日（火）晴後雨

今日七号室で掃除をして、それで全部完了す。今晚十号室にて、盛んに將棋を行ふ。柳川・望月・三宅の諸兄断然強し。

小林

六月五日（水）雨

今日も朝から雨。雨の日は-----

僕は雨が大きらひだ。性質の故かも知れない。兎角に不活撥な生活となる。その精でもないが、午前中は遂ひに缺課した。こんな事を聞いたら故郷の母が心配するだらう。なんと思ひながら自分の良心と悪心との葛藤の後遂ひにさぼる。

今日から三年目の人人が演習でゐない。張り切りメンバーの不在は舎の活氣を半減してすふ。室にも相手がゐない。獨り寝だ。浴い寝して貰った小學校時代を思ひ出して自分も大人になったなあ感慨無量。

雨の日は、気が弱くなる。遠い昔の楽しかった日、幼かりし日の思ひ出が浮かぶ。

兎角に人の世は住みにくい-----

節米・切符制度--- と砂糖マデ金以上の貴重品となった。お蔭で腹の虫が乱れ廻る。

体位向上の上からどうかと思ふ。

足れない量で不断普通のエネルギーを補充するのはちと困難。食事部の皆さん、その辺を良く考へて少ないながらも榮養ある物を恵み給へかし。近頃舎で將棋が盛ん。野球→庭球→將棋と皆の興味の變って行くのも面白い。

一年前の生活と較べて「悲境ニ在リテ奮發し、順境ニ在リテ悲ヲ忘レル」とか云ふのか切実に感ずる。

安逸の奔流の中に弄流されてゐる自己を見つめて、決意を新にする事 幾度か-----
再び来たらざる青春を記念すべき榮ある一日を有意義にやっで行かう。 (細田)

六月六日 (木)

今日此頃の天候は全く面白くない。今日、テニスを中止して、春雨を眺めてゐる。自分の心の中には、無念の涙が流れる。

初夏とは言へ、この春雨らしい、雨足を見てみると、何んだか、降下の速度が遅い様に思はれる。この感情のこもった春雨には、矢張り、物理の $MgTo$ 等と言ふ、理論は通用しないものか？ 空気ノ抗力が $○○○ヨ!$

島松へ出かけて、行った連中はさぞかし、天候の不運を嘆いて居よう。出掛ける日は雨天、二日目は晴れ後雨。

今日学校の窓から遠く南の方に、もきもくと、上がって来る夕立雲のような夏らしい雲が見えたときは、初めて、札幌にも、初夏が訪れた趣を悟った。

繚乱をきはめてゐる、花園の花、まぶしい程に輝いてゐる。うす緑のアカシヤの葉。重たげに荷を運ぶ馬の歩み。遊び回る子供、-----。

たしかに初夏だ。こんな夢のように美しい、だが雑然とした景色を見てみると、自然にノスタルジアの徴候が現はれ出す。

こう言ふ時は、勉強するに限る。ノートのブランク埋め。

六月七日 (金曜日) 曇後晴

例の踏切にて自殺があったといふ話だ。今度はメツ $○○$ ならず。死ぬのならもっと綺麗に死んで貰ひたいものだ。川又氏によると夫婦喧嘩の結果だったそうだ。

午後にはコートでテニスをやる。二二三四日間テニスは全然やらなかった。

その他に記す様なこともない。

河辺

六月八日 (土曜日)

我等予科三年の者、本日午後島松より歸舎す。苗穂に下車して意外に寒いのに驚かされた。島松は、夜中こそ一の成りの寒さであるが、日中は随分暖く汗ばむ程だった。雨も本朝島松驛出発の頃は晴天であったにも $○○$ 、札幌はどんよりとした雨さえ降りさうな天候にがっかりして了った。

歸舎すると黒板に、外舎生の歓迎の辞あり。久し振りに (でもないが) 舎に帰って、歓迎されるとは嬉しいものだ。

猶、夜中も我々のため下級生諸君の歓迎ストームあつたるを改めて感謝して $○$ 筆する。

(三宅 記)

六月九日（日曜日）

高商との野球戦あり。

朝から野球にはもって来いの好天気であった。待ちに待った、高商戦が今日あったのだ。我々豫科生一同は、應援團長を中心にしてあらん盡りの力を出して、うつて一丸となって應援したのである。我々のこの熱と意気とは始から敵を呑むの気概があった。團決の力！これによって我々は勝利を得たのだ。選手諸君の奮闘、これは言ふ迄もないことであるが、その陰に我々の熱意溢る、声援と團結した精神のある事を忘れてはならない。

晩は八時から、大通りで再び大ストームを敢行して、以て豫科健児としての意気を充分に發揮することが出来た。

今日この日この感激は、永久に我の胸の中に留ることであらう。

北大豫科 萬歳！ 櫻星會 萬歳！

六月十日（月） 晴

本日〇くも、天皇陛下横原紳〇に御親〇遊ばされ、我々国民一同一分間の黙禱を捧ぐ。この合図のサイレン、時の記念日の〇れて間違へた迂闊ものあり。

〇〇〇りに天候やや恢復す。本年は久々に全日〇の気候〇〇により凶作の憂あり。

柳川

六月十一日（火） 晴

夜梢に風強きも極めて暗し。伊太利、独を援助して遂に参戦す。夜節米運動について種々具体策を練り結局、飯はドンブリに盛り切り、一杯の配給制度と決定。大食組には大痛棒であるが、御國の為なら是非もない。

六月十二日（水） 曇

お祭りも近いと言ふのに、仲々良い天気にならない。然今位から稍々強くなり、青空もみえて来たので街に行く人も朗らかである。唯朗らかならざるは、舎内の大食家連、割りあての井をかかへてうらめしそうな顔をしてゐる。柳川氏は井に手も付けず、散歩がてらに塚越君と共に、しるこ屋 五月へ。

伊太利は参戦するし、独では、パリに一步一步近づくし、早く日本も重慶を取ってもらひたいものだ。でないと、寄宿舍から、大塩平八郎が飛び出すかも知れぬ。危険々々。

〇別

六月十三日（木） 晴

夕食はさうめん益々節米も本格化。豫科三年阿寒旅行に行く人数が七割を突破しさうでないで吾々勧誘に大章となる。今日は実科の人々が実弾射撃をしてくる。夜街を歩いてゐたら東京から来たらしい学生に合ひ、ふと東京が戀ひしくなる。祭りのちょうちん

立が立並んでゐる。

六月十四日（金） 曇

豫三年生實弾射撃。点数は小生が最も良いらしい。二十八点。

六月十五日（土） 曇後豪雨

待ちに待ったお祭りが来た。勿論お祭り等嬉しくもなんでもないが、エッセンを腹一杯食へるのが嬉しいのだ。何を浅ましいんでせう。

午後二時半頃迄暖かな曇天で「良いお祭りですなあ」の聲が市井に満ち満ちて居たが、三時を過ぐるころ○肺然たる豪雨に雷さへ交へてやって来た。小生も濡れ鼠になって歸へって来た。

歸へる途中小生の背後より来たる二婦人ののたまへける「着物 すぐまないでせうか。！」

塚越

六月十六日（日）

昨日の雨を忘れてしまった様な、朝目覚めると良い天気である。祭りであるし、日曜日であるし、通る電車も通る電車も、満員満員。映画館は全て物すごい超満員、座れたら幸いと言ふもの。逍遙通りの芝生は、辨当をもって近いピクニックに来た群れ群れ、青草が、赤・白・黄・緑等色々に染め上げられてゐる。

夕方少し空が曇って来た。明日は雨にならねばよいが。今日が祭りの終日である。思へば去年予科に入り札幌へ来て此の祭りの日、久しぶりでサーカスを見物して来た当事の事が思ひ出され、思ひ出の街角！思ひ出の灯！追想にふける吾人の心も、感傷の二字にしたされる宵であつた！

Y・K

六月十七日（月） 曇 夕小雨

R・O生

昨夜は庭のローンにテントを張りて、キャンプをせるものありたりき物好きもあればあるものと人々の笑いと驚きを得たるも有志三名至極心気良き一夜を過せり。天はうすく曇りて、月影おぼろなる月を仰ぎて、エルムの大樹の下に沈思すれば、○塔の鐘声一〇を告ぐ。嗚呼、この威この懐、何ぞ○言はんやである。暁に至れば冷氣せまり、寐〇〇げられたり〇〇〇も甚だ面白き一夜なり。舎生一同無事故健在。

六月十八日（火）朝から雨降る

島松に行った小林君はさぞ濡れた事だらう。○最近の節米の影響か、榮養不足をうったへる者続出。御汁粉屋の繁昌するのも無理はない。豫科も準試験態勢になったやうだが散歩に行くもの。アテネ・サッポロに歸りより道するもの。ナイトショウに行く〇〇出するものが多い。

○山

六月十九日（水）

試験開始の鐘の音、教師無情の響あり。答案コレデの点の赤、怠者必落の理を表す。奢れる者は久しからず。ただコンパの夜の夢の如し。猛き人もついにドベリぬ。一重に蛇の前の蛙の如し。 試験平家より。

節米開始のわんのめし。食事部無情の響あり。他人の残したわんのめし、猛者必食の理を表す。腹にたまるも久しからず。ただ河の水の如し。猛き人もついに参りぬ。一重に町に食を求めぬ、遠く異朝をとぶらへば、フランス・ドイツの節食に、近かくにこれをたづねれば切符制度の砂糖あり。

アメリカの参戦とはでまだった。

夜月次会あり。宮部先生をはじめ、逢阪・鈴木・犬飼・各先輩函館高水より今時新設の水産學科に歸って来られた時田先輩が御出席下さった。

月次会は常の如く、山根委員長の開会の辞にて始まり、ついで副舎長の御話は最近一ヶ月のニュースをとりませで、努力者必勝の理を表す。次に塚越食事部長たちいで、舎生最大の苦痛たる節来緩和の報をもたせば、舎生一同拍手を以って之に答へたり。次に大田委員の指名により三村君が新入舎生の一員として挨拶、後○論あり。

六月二十日

三年工類の連中、阿寒旅行に出発した。

六月二十一日

三年農類の連中、阿寒旅行に出発した。愈々試験も切迫したのでそろそろ猛勉をはじめる者が出て来た。一時の試験を目標とせず大なる永遠の目的に向って勉強しよう。

六月二十二日 日本晴

未だ試験迄、大分ある。今のうちにうんと張りきって遊んでおかないと、試験には入っては取返しが見つからない。

毎日、修学旅行團で植物園が賑ってゐる。

今日は実によい天気になったので、一入すべてが美しくみえる。初夏の植物園は太平そのものである。

ぢわりぢわりと日にてりつけられてゐると思はずねむくなって、日記などかくにはいやになる。だからもう止めとしよう。 ○○

六月二十三日（日） 【高尚なる随想】

暁方近く、何くより入りたるにやあらむ一匹の犬かん高き声して縁の下をかけめぐり、

あがうまいを破る。折角の日曜なれば、心やすく眠らんと思ひしに、いと悩ましき事なり。暗き中に一雨過ぎて、燃ゆるが如き緑の中よりさし出する初夏の陽光、先日にも増してうららかなり。數多行を交ふ人の心もかるく、降り注ぐ陽光に色とりどりの姿も晴々し。今の中、遊びおかむ程には、試験になりては取り返すに術無しと言ふもまことなり。夏されば、植物園に遊ぶ人の數も日毎増し行く。今日は昨日に引きかへて、いとけなき子等數多ありて、澄渡りたる青空の下心ゆくままに遊びたわむる。都より遙けき海路を越えて、北都を訪れし女學生の一團あり。なつかしき人を見出して、水ぬるむ池畔に立ちて語り合ふ人あるもほほゑまし。

づきんに白きすぢ三本を巻きつけたるつはもの共、今日は余り大路に姿を見せぬは、おのがじし水牛のごと勉學にいそしむにやあらむ。あな恐ろし。

長き旅路よりつつがなく歸り来りし健さんより、家づとの饗應あるは、いと心暖く有難き事なり。北の風に光る北の花アカシアも既に開きそめぬ。日西にかたぶきぬ。

もし試験とか言ふめるものだになかりせば、いといたら美はしく、楽しき北の國の黄昏なり。

古鐘の音流れ來る幌都の大路は、久しく恵まれざりし此のよき夜にあひて、あくがれ出で、すずろありきするをのこをとめの群多し。されど汝等安逸に流るる勿れ。

小成に安んずべからず。日の本は世界に冠たりなど言ふ。

小さき心根を棄て、そのすぐれたる所をあまねくとつ國に求め、高き高き人となりの完成を目ざして、おのが修養に務むべきなり。

静かな、静かな幌都の夜は、今宵もしんしんとして更け行く。 (SAITO)

六月二十四日 (月) 曇り後雨

朝八時頃、予科三年生が歸つて來た。皆、天候にも恵まれ無事に歸つて來たから何よりである。晝頃より雨が降って教室の内は何となく陰鬱だ。

予科三年生は兵營宿泊に出掛けて舎の夜るはひっそりとした感じである。 田村

六月二十五日 (火) 晴

豫科の試験もそろそろせまり、皆バロメーターをぐんぐん上げて青くなってやっである。僕などは試験がないので、何だかすまない様な気がする。

今日午後三宅・菅沼・細田・山根の諸兄大いにテニスを行ふ。

晩特別室にて決算が行はれた。

7号 S・K 生

六月廿六日 晴

久し振り雨がストップしたと思ったら、此の天気だ。イヤになつちまふ。東側の部屋はお晝から西日が輝り込みホテッテたまんない。早く試験が終ればえっナー。

牧ちゃん、帰る準備が出来たとの事。旭川のお姉様の所へ行くのだって、夜も眠られな

いんですって。

本年は舎生の樺太行きが流行してゐる。敬服に値する。小生、先日の殖林供業の晝が本当につらかったので樺太でお勤め出来さうもない。サボッテ日給をもらふのが何だか気の毒だ。

広チャン

六月二十七日 快晴

今日も快晴。本格的夏に入ったのか暑さがきびしい。南国四国生れの「三木御大」が上半身素はだかで勉強してゐるのを見ても如何程暑いか---

白楊ノ實だか花だか葉（マサカ）だか、植物丙の僕に知る由もない棉のごときもの折からの風に雪の如く舞ふ。コート隅に溜っては堆積してゐる。蜘蛛の巣に引掛つたのは祭典の出店の「棉飴」を思ひ出させる。

机に向つても半分は歸省した事を考へる。

試験よ早く来い！そして早く去れ！

予科一年目演習を終えて歸る。日焼けした顔、連日の奮闘が偲ばれる。

講義七時間。ビッチリ積み込んで歸舎する時グッタリのびて歸つて来る時「お歸りなさい」のなつかしい聲もなく御茶も「エッセン」もない時は一寸淋しくなる。早く歸つて家族的團欒に浸りたい。

全舎生の試験成績に幸あれかし！

八号 DER・MADEMOISELLE

六月二十八日 快晴

今日も快晴。試験も近ぢき勉強もよいが、體にも注意致しませう。

六月二十九日

暮れ行く夏の日の夕を、独り窓辺によつて、桑園の方からやつて来る汽車を眺める。（と言っても煙りだけだが）。

赤いシグナルが青くなる。

今日、大田兄が歸省する。如何にも嬉しそうに挨拶に来た。またあそこの踏切のベルが鳴り出した。今に〇〇たる音をたてる汽車が通り過ぎて行かう。

試験さへ終了すれば、早速歸省する身を顧みて同時に応召された兵士、手に錠をはめられた罪人の旅が頭に浮ぶ。

モチ

六月三十日 日曜日 晴後曇

【試験勉強】

試験を目前に控へた今日の日曜日は戸外の誘惑を却けて精進を續ける。時悟も札幌で一年の中一番好季節。

朗かな天氣に浮かれ出る人も多く、街路のアカシア〇郁なる香を運んで来る。將に好季節なり。おむかひの植物園も朝から満員の盛況で入り口の詰所に居る守衛さんもキップ切りにいそがしさう。

午後、午前の勉強の後のテニスに興ずるもの多し。

明日から七月。今日で昭和十五年の半ばはすぎんとしてゐる。

予科入学以来、第七回目の試験を受けんとしてゐる。

光陰矢の如し、將に宣なるかな。

[十号 三宅]

七月一日 月曜日

鬱陶しいしめった天候である。予科の試験が接近して来るが、前日までは勉強する気がない。明後日から張切りつもりだ。試験で頭がふさがってゐるまに世界は刻々と動いて行く。皇軍は佛印国境で活躍してゐる。英国の〇〇を根絶するのにこれで〇〇だろうか。獨と提携して英を滅亡する方がよい。北欧の野蛮國如何にして老獺英を倒すか。夏休みの中に世界地図は〇〇変りそうだ。何しろ試験は面白くない。

[十号 河辺]

七月二日

夏〇〇〇〇はやくも肌さむき日なり。予科も学部も今日で講義は終わった。予科生勉強に大〇、久し振りに舎の中も静かである。僕の勉強もすすむ。

畜産部会、今日は何〇にて開かれてをる〇たら〇い。月が〇〇〇〇か。

玉山君、今朝帰省さる。

Y・K

七月三日 曇小雨

予科ボーイ試験開始の前休日。朝飯晝飯に始めて外来ライスの食事が出た。舎生一同、喉に通らぬと大騒ぎ。つくづくと御米の有り難さを感じず。夜、外来の余りにて夜食が出る。

ヤマネ

七月十日 晴

平山君旭川騎七營内訓練のため夕刻出発。樺太夏期労働のため夜、菅沼・三宅出発す。

七月十一日 晴後曇

午後、斉藤・望月両君帰省。両君とも十和田を見物して行かれる由。平井・塚越・山根三君は手稲登山。他に夕刻テニスに興ずるものあり。夜、映画に行くもの多し。細田君、試験で一人不乱。

七月十二日 晴

愈々本格的夏がやって来たらしい。暑くて、体がだるい。東京なんかには較べれば、尤も

物の数ではないかも知れぬ。

七月十四日（日） 晴

非常に暑い。午前の急行にて塚越・三木両君帰省。健君は支笏寮へ。平井君は昨夜から小樽に行ったきり帰らぬ。

夜は非常に涼しい。急に蠅が増えた。

七月十五日（月）

朝は晴れてみたが、颱風が近いた故か次第に風強くなり夕刻より大雨に襲はる。田村君と公区長を訪問。米・石炭の配給につき相談す。竹澤君、午前は學問、午後は散歩、夜は映画「少年の町」と、一分の無駄もなく一日を100%に利用して居る。頼もしく哉。朝平井君旭川へ出発。インターハイ必勝を期しての猛練はさぞ苦しいだろうが、それも精神修養の一つだ。一つを目的に向って邁進し、遂に初志を貫徹した快感を味って下さい。旭川方面の河辺・川人両君それから、十和田組の斎藤・太田・望月の三君から、楽しそうなニュースが續々と舞い込む。本日より六十二〇化學會始まる。

木炭配給切符（三俵）を受領。

山

七月十六日（火） 晴

夕刻柳川君旅行からより帰舎。よほど御疲れと見えて、珍しくも十時半頃から御就寝。残りの三人組は小生の室にて田村氏提供のコーヒーに舌鼓を打つ。今日から舎の食事は朝夕の二度のみになる。夕食はオムレツ。竹沢君は朝寝坊の超努級。十二時迄床の中に小母さんが、死んだのぢやないのですかと心配してみたっけ。米内内閣総辞職発表あり。

山

七月十八日

支笏寮集團生活より帰る。やはり札幌の方が暑い。夕刻、皆でテニスに興ずる。

七月十九日

柳川・田村両氏は学校へ。小生寮生活の報告原稿を書く。竹澤君、毎日米の配給切符を受取りに市役所に行く。誠にご苦勞様。

七月二十日

朝より雨、午前中降り續ける。午後に新装の東宝に「美しき争ひ」を見に行く。頂度ひけ時であったせいもあるが、札幌には職業婦人の多いのに今更ながらあきれる。夜には田村氏もキノーに行く。今日は大してすずしい。

七月二十一日

日曜なので銭函に行く人が多勢街を通る。丸井の戦時経済展覧会、三越の藝術愛好協会の展覧会を見に行く。柳川さんは三越でおおいそがし。午後農学部コートで寄宿舎生四名上半身裸でテニスをやる。かいてきなり！夕宵大通りを散歩。夜燈の光さはやかに、そぞろ歩きの人引きもきらず。このところ夏宵の札幌は〇刻千金か。夜竹澤君のところ
で御馳走になったいちご、まことに妙なり。

健

七月二十二日 夜に入り雨

超努級ぶりも大分うすらいで、九時すぎに起床。

早起は気持ちがいいものだ。朝食兼晝食をくいに中央食堂へ出かけると、見本怠。見本がのってゐない。さては早すぎるので未だ出来ていないのかと思ったら心配無用。ちゃんと出してくれた。中央食堂の米の〇の〇のんは感激。

午後は東宝へ「〇〇〇〇」をみに行く。実にいい画映である。よりよく生きようとする美しき人に、ああその間に何とみにくい人間も存在するのだらう。そして人の美しきを感情をねほりはほりつつき出そうとする。判事とやらいふ、人権が〇くゐるのだらう。一体は世の中にはしゃくにさわる人間が多くゐるすぎるややうだ。

感情は事を複雑にし、本幸にする。

理性は事を簡単にし、幸ならしめる。

正しき認識、それには感情の入りすぎるを許されない。

建さんが去った。残舎生は、柳川・田村両御大と共に三人である。

竹沢

七月二十三日 朝の内雨 すぐに晴れた

夏休みの札幌は至って平穩である。米の配給券をとり市役所へゆくのがかなりめんどうだ。その他、郵便局へ行ったり、力ゐろハウスへいたり、おやきを買ひに出かけたり。舎に残ってゐても案外に忙しいのでおどろいた。他の連中はさぞかしなつかしい家のやはらかいふとんの上で太平樂を〇っておいしいものをたべてるのだらうに。いよいよ二十五日の夜、札幌のお別れすることに決心した。

あそことあそことあそこに行って、あれとあれを食べ、それから街を散歩して立つとしよう。

それにしても平井君が歸ってこない。お母さんが病氣だといふのに。

竹沢

七月二十四日 雨々々 日の目もみえぬ

柳川・田村両御大相変わらず研究室へ出かけて行って、稲の穂の長さを計ってくる。

気分だけは一ぱしの学者のやうだが ×××××××× ないらしい。

雨がふる日はとっても涼しい。寒いくらいだ。恐らく今日の気温は二十度以下であらう。

きっと目をまはすことだらう。何しろ、十度以上も高いのだから。

澁谷榮町局からの三十七円の為替、差出人の名が分でないので、田村さん大よわりである。一体だれがそんな無責任なことをやったんだろう。

北十七条まで無駄足をふまされた。

鉄北ぜんざい、又當分品切とのこと。大打撃・

竹サワ

七月二十五日 久し振りで朝から快晴である

竹沢君、予科生の〇りとしてよる九時十七分の列車にて帰省した。

七月二十六日 半ば曇天の余りよからぬ天候である

平井君が馬の合宿より帰られて、即日帰省された由。お母様の病気の様子をきいて驚いてゐると思ふ。学校に居った為に会へなかったのは残念である。

七月二十七日 珍しく朝から〇天気である

久し振りに夏が来た。この期を逸せすと汗り僕はとまりがけで忍〇に出かける。蘭島の水は冷い。夜は研志所で底抜け騒ぎ。田村君この日も猛勉の由。

七月二十八日 晴

蘭島より歸へる。物凄き人出なり。

七月廿九日

朝市役所にゆき米の配給を受ける。来月よりは一合三勺になる由。益々以って大打撃。夕方、**Vacation note** 平山氏より来る。

七月三十日

Vacation note 発送。

八月一日

平山君、旭川より帰舎。田村君、午後十時五十分発列車にて、道内旅行に旅立る。平山君、しやばにでたせふすべてがきれいに見えるらしく、しきり札幌の町はきれいなりと感激して居る。

八月二日

暁方珍しい大地震。震源地は小樽の付近とか。河辺君、帰へる。やややせて居るが中々元気。四十二回もうけたとか、もうつたとか―― 土用の丑の日。

札幌市民の大半は銭函へ。 今日より市立女子校 お休み。

八月三日

朝の急行で河辺君かへる。

八月四日

夜平山氏、函館経由帰省。今日よりは一人。

八月五日

市役所に米の配給をもらひに行く。当分外米〇りての〇である。

八月六日 雨

ぐっと涼しくなる。

八月七日

月遅れの七夕。一日中雨降り。

八月八日

今日も又雨。天候不順なり。川又君帰舎。

八月九日

本日電燈会社より、一月以来の電灯不正なりとして抗議を申し込まれる。罰金 1,000 円也。本日より米切符制となり、一月間の切符配布さる。

八月十日

夕方の急行で川又君帰省。

八月十二日

夜田村君樺太旅行より帰へる。

残暑きびしい。新聞によると東京よりあつい。道会議員選挙終る。“瓔珞みがく”の先輩佐藤氏落選する。中ノ女学校授業開始。

英・独 大空中戦展開。

八月十三日

本日より、お盆なり。既に秋風立つ。風呂屋休業、十三丁目迄行くは〇につらい。

八月十四日

風強く秋愈々来るを思はせる。北大に見学者相つぐ。大学やら公園やら分からない様な

状態だ。

八月十七日

本年度最高気温を示す。残暑きびし。

八月廿日 雨

八月廿三日

毎日毎日気持ちのいい晴天がつづく。

寄宿舎の廻りを浮浪人がうろつくといふので、今朝は小母さんに早くたたき起こされて追っばらひに出動。ルンペンを捕へて「何でうろつく」というたら「飯をくれ」といふから「俺も市役所からもらって居るんだからお前も市役所にゆけ」といってやったら、かへって行った。

実験も今月一杯で片がつきそうだ。

来月早めに帰還と○さうかと思つてをる。

八月廿四日 【牛豚とホモサピエンス】

先日学校で話をしたてたが、ある人の説によると、下宿してをる奴は牛・豚と異なる所はないと、何故ならば自分の好むと好まざるとに物で出されたら料理は喰はねばならぬ。それは丁度、牛豚が飼料をあたへられて喰ふのと同じだと。この理論より行くと、**Homo sapiens** たらんにはすべからく家庭をもたねばならぬ。

僕も小母さんの飼料にはあきてきた。ああ家にかへりたい――そして萬物の靈良たる生活を夢みたい。

八月廿六日

昨夜より強雨を伴ふて豪雨○然として降り来たり。終日降りつづく。

この頃の天候不順の為、上川地方に稲○に病発生して北海道本年米不作の上に、一大凶報をもたらす。三割減の由。

今度から“みそ”“醤油”も配給制になるとの事。みそは一年一人当一貫目、因みに舎では一人一ヶ月一貫を消費してをる。食事部大恐慌であろう。

帰省の寝台券を取りにいったら売切れ、いやになる。

この頃は就職の問題と共に身の雑事が多くてこまる。

八月廿七日

中学入学以来、既に家御を出る事十一年。其の間に最も精神的にうるほひのある、希望ある生活をしたのが予科三年の生活とこの頃感じてきた。○恵に生き情熱を以つて事に

あたりて何等不自然の感じられない生活は高校生活を除いてはないらしい。
学問に生きんとして生活を考え、現恵に走らんとしつつ家御を思ふ。
大学生活まさに終らんとして〇た成魚生。
予科生諸君よ、情熱を以て慎〇を探求し希〇〇〇〇を追へ。学問の何たるかも知れ。学問の知らない大学生の如何に巷に多き〇〇る。
試験管をふり、機械の設計をするのは決して学問ではない。技術と学問をはき違へずに進み得る素養を作るのが予科時代の深題である。

八月廿八日

日本の海軍が偉大なる技術的發展をとげたのは理〇を重用した為だといふ事である。
工学生一即ち応用科学を選んだ人一は〇〇され事物を深くつき込み研究する心構へがないので、考へるのに飛躍がないとの事である。
農科一工科等の **appl-ed-sciennce** を学ぶ。我々には、一考を事すべき話である。我には **sciennce** を学ばずして **techni-qhe** を学ぶ。一回の戦となる恐多分にあり。

八月三十一日

薄別にゆき無意根山に登ろうとするも雨にて帰へる。薄別温泉自炊にて、一泊一両五十銭。来春は考慮の必要あり。

九月一日

夜の急行にて竹沢君帰舎。

九月二日 曇

朝十時の急行で、柳川さんが帰省するので一寸無理して、九時に起床。駅まで送りに出かけた。そこから三宅さんにヴァケイション・コートを送信して、予定の買い物をしてかへる。丸井で、日本画展があった。仲にいつものがあったが、日本画は清楚で筆数が少くて、しかも具の〇をあらわしてゐるようで、みてゐて深みを感じる。

しばらくぶりで舎にかへってみると、何等束縛のない舎生活よ。本当のよさがつくづくわかる。

五日ばかり親戚の家へ泊まってみたあげくなので一層そう感じるらしい。

夜、菅沼さんが女人一人と共に樺太より帰舎。頭髪とひげがぼろぼろと生え、さながら山男然。少しもへばった様子ない。

竹沢

九月三日 曇 雨 【帰省への感慨】

夕方ポプラ並木の方へ散歩の途中、福本さんに会った。三・四日前に歸った由。

夜七時二十三分の臨急で太田君が、同四十四分ので山根さんが、いづれも元気に歸舎。

菅沼さんは九時ので歸省。そろそろ皆んな歸舎するのに歸省とは、一寸おもしろい。歸

省の殿りここにあり。

夜は八中時代の友人が来たので、久しぶりで十二時近く迄だべった。

竹沢

九月四日 大雨

夜太田・竹澤両君と共に宮部先生を訪問す。

九月五日 雨後曇

午前八時、山根氏宿泊教練のため島松に出発す。残るは竹沢・太田の二名のみである。二人で街を散歩す。

休暇中の舎生活はのんきである。淋しい位静かである。気が落ち着いて読書に好適である。舎生の大方は未だ未だねばっているものと見える。論々

九月六日 晴曇〇〇 【配給担当おやじへの鬱憤】

長雨もやっと上った。気分よくなるべき日なのだが――――

午後市役所へ、砂糖配給調査書を提出するついでに、米配給券をとりに行った。すると経済課の例のいやなおやじのやつ、曰く「こりや今書くのはめんどうだ。全員そろってからとりにくるといいや。青年寄宿舍ってなにをやってるんだい。え！学生。どこのだい？あー北大のか。うふむ 伊藤さんのとなりだね。じゃちかいや、ますますいいや。ふん。」 ばかげてやがる。誰も好んでとりにきてるわけじゃなし。皆んなお互いに苦しんであるのだからもう少し何とかていねいに言ってくれたらと思ふ。実にしゃくにさわった。が、自分一人のことではなし。ここでうつぶんをはらすことも出来ず、だまってかへったがおかげで今日といふ天気の良い日を、くさくさして暮らさなければならなかった。ええい、あのおやじ、ばかやろう。

竹沢

日記の後には署名ませう。

九月七日 晴

久し振りの晴とか気持良し。けだし札幌の最もよい季節であろう。秋には、凋落せんとする朝の欄熱がある。塚越歸へる。

九月八日 前日と同じく晴

赤トンボが沢山群れて居る。静かな感じだ。今大陸に幾百万の軍隊が生死の間に戦って居るなどと云ふことは考へることも出来ない程平和だ。

健君、細田君、三村君歸へる。

九月九日 續いての晴天、夜半月が美しい。

真黒なエルムの陰に所々うす明るく月影がさして居る。電燈の光が美しい。

小林・河辺・戸田・平山の四君歸る。

九月十日 晴

齊藤君午の汽車で菅沼・望月の二君、七時半の汽車で歸る。今日も雲一つないよい天氣。内地の小規模な景色になれて来た目には、秋陽に明るく輝くローンの上に亭々とそびえるエルムポプラの大木は、この上もなく美しい。すき通った秋の氣の中でトンボとたはむれる子等の姿も美しい。三宅君歸舎。 渡辺

九月十一日 晴

予科及び實科の授業始まる。夜の汽車で柳川さん、田村さん歸らる。川又君も歸舎。

九月十二日 晴

予科教授、講師中数名休んでゐる。
校内テニス場では、盛んにテニスをやるものが多い。
錦湯は今日迄休みか。カマを取変へたのだそうだ。
望月の長髪今日を最後に、横山理髪店でクリクリとなる。記念に取って居けばいい等言ふものがあつた。

九月十三日

舎生に二名宛の交代に、日々の米を買ひに行く。何も小学時風景の〇か。
夜は三・四名を残し、平山副舎長を始めさつと何処にか飛び立った。評判の映画「駅馬車」鑑賞に行くもの多し。平日は学生を入場させぬとかデマの様なものゝ乱れ飛び、着流しは何としたことか。
今晚はいやに冷える！寂だり無たり。

九月十四日（土） 曇 【科学者の心構え】

例により夕食後大多数の舎生、舎より姿を消す。残つた数名ピンポンに興ず。齊藤君、米買で一列励行一時間とは、本当に御苦勞様。しかしこの苦勞は、我々全部が否現在の日本が負はなければならない苦勞である。

卒業論文の方はまだ実験の準備を始めただけで前途険しである。柳川君の云はれるように、工學部のような応用科學と云ふより、技術一点張りの教育を受け、學問から遠ざかる傾向のある事は事實であるが、しかし **engineer** の仕事と云ふのは真理を探究する事ではなくして、現在ある科學の知識を総動員して、今迄よりより確実なより性能のよい機會で作ると云ふのであつても、差し支へないと思ふ。

真理を探究するのは學者がやる。その學者の得た結果を多くの人が有利に使へるような形にして〇〇する事は、云ふは易く行ふのは非常に難しい事で、各方面の広い範圍の知

識が必要とされる。映画が〇〇ばかりでは成立たないようにこの世界も自分の作る機械の精度を $1/100000$ 向上した事を以て満足する〇〇を必要として居る。Engineer とはこの役を演ずる人でなかろうか。現在の日本は我々に科学の成果を學んで之を工業に応用する職工を必要として居る。職工たる覺悟を持った人が応用科学をやる技術者とは決して學者ではないと思ふ。

玉山

九月十五日（日） 曇後雨

今学期最初の日曜。高商對野球戦あり。舎より多数應援に行く。途中雨で、五回戦までで延期と成ったそう。

車では皆、思ひ思ひに外出した。夜米を買ひに行った。米屋に行けば、切符のある限り米が買えるのだから有難いもんだ。

室乃組変への発表あり別紙の如し。

九月十六日（月） 【十五夜とオハギ】

世の中はとかく皮肉なもので、昨日あれほど降って高商戦をおじゃんにしたくせに、今日は又実にいい秋晴である。

0時十六分の急行で三木さんがひょっこり歸ってきた。今日は十五夜で、オハギが出ることを思ひ出して急いで歸つ多とみえる。ハガキには、十六日夜かへるとあったのに。

八時から月見の宴。折しも悦にたる月がエルムにかかると我勝にとオハギにくひつく。

月なんかをそっちのけ。正に月よりだんごである。

竹

九月十七日（火） 朝小雨

非常に寒くて九月中旬とは思へぬ。尤も北海道の人は當り前かも知れぬ。丁度冬と言へば我々は日向ぼっこを思ひ出し、北國の人は雪を思ひ出す様に。

教練の教官は物凄く張り切つてのさばり、我々を兵隊扱ひにするのだから癪にさわる。

夕方五号室三階よりバリカンが見付かり、戸田・竹沢・小林・細田の四君が虎にされる。

田村さんの御手並み大したもの。「明日は君をやってやる。」なんて言つてゐる。正に寄宿舍断髮令。柳川・玉山両氏、手拭をかぶつて寝ないと危ないですよ。

夜、十六夜月美し。遅くまで張切つてピンポンをやる者あり。

九月十八日（水）

すこし曇つた涼しいを過ぎて寒いといった感じのする日だった。今日は北白川宮の喪儀が行はれ、全国一斉に御英靈に対し哀悼の意を表し奉つた。

田村

九月十九日（木）

日に日に寒くなつてきた。次の如き発表あり。「九月二十九日（日）石狩鮭見学」「十月



四日（火）文武會テニス大会出場」「十月六日（日）、七日（月）空沼登山（未定）」以上運動部。「楓林原稿の締切は十月十日」以上文藝部。 小

九月廿日 金曜

此の二三日めつたり状だナアーとしみじみ思はれる様になった。〇〇等夏服ではチョイト寒い。コホログも鳴かず、何だかその辺の垣根の影にも冬がよそほいをつけて身をひそめて居る様に思はれる。落葉も、、もうそろそろ始まるらしい。 三木

九月廿一日 土曜

小島の春の映画見物に出掛ける者多し。
新体制になって学生の休日以外の映画館入出は禁止されたので少々閉口だが、文部省推薦のものなので、今日は特別に許されてゐる。制服で行っても差支なし。 三木

九月廿二日（日）

昨日の秋晴れに比べて今日は大分雲がある。
午前中植物園内を久し振りで散歩すると、三脚を立てて寫生してゐる小學生や女學生が沢山ゐる。日比谷公園の様な花壇には、美しい花が咲き乱れ、母親と女の子はその種をとるのに一生懸命である。温室にはメロンがなり、バナナが随分大きくなってゐる。今日は舎では皆何処へ出掛けたのかがらんとして、小母さんが一人一生懸命に廊下や便所の大掃除をしてゐる。夜、明日の手稲登山のエッセンを貰いに出掛ける。明日も休みなので、あちこちの部屋からは絶え間なくだべり声が聞こえ、何時になく賑やかな夜である。 (斎藤)

九月二十三日（月）

平山・山根・渡辺・三木・斎藤・河辺・三村の諸兄と共に、手稲にピクニックを行ふ。沢の登りづめで昼食。後少し登ってにわか雨に会ひ雨宿り。ささのつゆやどろにまみれて頂上に一時半頃着く。とつてもうまい「ゆであづき」にしたづつみを打ち、コッヘルをわかしそこねて、歸りは千尺高地の少し下から軽川駅までかけ足。皆おくれそうに成ったが、汽車にはまに合った。夕食の時おかずが沢山残って居た所からして、舎のひるはさぞ寂しかったろう。 戸田

九月二十四日（火）

休みが二日続くと、大概学校へ行くのが嫌になる。二十になつても二十一になつても、もっともっと年を取つても、親父等の送金を仰いで、我儘なことを言つて、學校へ通ふ自分等も、月も下旬ともなると財布は冷い。暖爐でも入れねばならない。
櫻星会の野球大会が今日から始まつたが、小生らのクラスは真つ先駆けで散つた。帰つ

たら、三宅様のかけ聲と共に、部屋換りの最後の組が行はれて居た。
小生は発熱、頭痛で床に臥す。

九月二十五日（水） 【孤独の感傷】

小生は學校を休業す。誰一人居ない。廊下を便所へと通うのは一寸寂しい気がする。
夜も床についた。他の人々が寿司屋へ行くのが羨ましかった。三宅さんが見舞いに来て、
病氣のとき寝ながら考へるのは、悪くないと言った。健さんもそう言われた。私は考へ
思ひ出に耽ることが悲しくてならぬ。一自分の悪点が暴露されるからである。

Toiling—rejoicing—sorrowing こうして人は生活して、その日々を暮らして行くとか
言ふ。して見れば私が感傷に、澱むのも當然の帰結かもしれない。

九月二十六日（木）

今日も病人。

寄宿舎の天井には鼠が居る。暗い廊下は子供が走る。二号室の片隅には三宅さんが胃病
で寝てゐる。三号室の片隅には肺病になりそうだと悲観してゐる自分が居る。今日の午
前の寄宿舎も、皆の人々が學校へ行ってしまった。十時頃は、まあこんな所でひっそり
したものだ。夜は、何処かの部屋では集会して、座談会めいたことをしてゐる。特別室
では決算をやって居る。

自分は十一時頃眠ってしまった。後知らない。

九月二十七日（金）

私は昼間、一時間目休講だと云って、遅く起きた三宅さんと連れ立って大学病院へ行っ
た。

午前九時頃、太陽は燦燦と照り空は青空、自分の体の調子は全く回復した様だったが、
亦熱でも出ると悪いと思つて、我慢して病院へ入った。診察代五十銭、レントゲン四円
と四円五十銭出費させられ、結果は只の風邪と断定され、ますます損をしたと感じた。
夜は寄宿舎に閉じ籠って居たのは、自分のみ。他の連中は何しにいったかも知らない。
〇〇〇〇見物か、寿司食い位のところだろう。明日は月次回になってゐる。

九月二十八日（土） 【月例会の演説内容】

晚六時半開会の予定の月次回も、遅れ遅れで始まったのはそれでも七時十分過ぎの頃だ
つたらう。

来賓は宮部先生、青木さん、鈴木さん、退三さん、亀井さんの以上四氏。例によって例
の如くそれは進行したが、舎生の演説では、渡辺健さんが夏期大学について科学の事を
論じて居られた。科学の基準が欧米の諸国より劣って居ることを述べたのである。

三宅さんは樺太沿いの中央試験場へアルバイトに行った話と、敷沓の話と船の話をされた。船とは、宗谷海峡を渡る稚泊連絡船のことである。三宅さんのあとを追って、菅沼さんがその続きを話した。

次に紹介されたのは川又君、彼はアルバイトする前の心理について、自分の身に対する感傷から話し出した。最後は戸田君が、時局に相応しい演説をした。以上の舎生の話に代って、満州へ旅行された鈴木先生が、先輩を代表して満州ところどころと云ったような題目で、先生が各所で弟子達の厄介になってしまったことを語られた。宮部先生の訓話は、禁酒禁煙と健康法であった。

かくして茶菓の饗応に行った。十一時散会。

申し添へて置くが、この月例会の委員長は菅沼さん。委員は齊藤君・小林君・竹澤君だった。

九月二十九日

昨夜散会前から降り出した雨は、朝になってきれいに晴れた。

山根さんの提案の、右股瀧行きもおじゃん。各自グループになって、いずれにか外出す。

太田さんと、渡辺君と、川又君と三村君と、私とは、中島公園へ遊ぶ。ボート漕ぎに打ち興ず。

九月三十日

昨日の寒さも幾分か暖かく元へ戻った。午後は教練の査閲の予行で、分列式をやる。

十月一日 晴後曇り

興亜奉公日。九時遥拝。黙禱を行ふ。防空演習始まる。

海軍少将の世界新秩序と日本と題する講演あり、ドイツの戦争ニュース及び聖戦三カ年の映画が同時上映さる。興味深きものあり。

本日より、新食事部諸君の活動開始。多いに期待す。夕食四時半。

夏季休暇中の一部の人々の食費募集掲示出づ。

三村記

十月二日 水曜日 曇

本日より防空演習は本格的となり夜は燈火管制実施さる。我国の燈火管制も戦時下の事として随分酷しく、注意された部屋もある様だ。

秋愈々深まり、木々の紅葉も目につく。秋来りなば冬遠からじ。楽しかるべき冬も近からん。

ミヤケ

十月三日 防空演習で真暗

十月四日 ”

十月五日 ”

防空演習終了し。明るくて楽し。晴

二千六百年奉祝の文武會開催。テニスの試合に出場。三〇で医学部にチームに敗ける。

塚越

十月六日

朝早くからハイキングに出て、空沼のヒュッテで半溪沼に映る月を眺め、乍ら晩飯を喰うまでは、殆ど歩き通した。

空沼嶽の頂上に登る途中、雨が降り出したが「吾不関〇」たる意気込みで、頂上に到着す。雷鳴宙に響けば、風飄然として豪雨を供へば、眺望もきかずそのまま下山す。

晩飯後、テーブルをかこんで宴会を開く。

月依然として輝き居りしがやがて雲に隠れぬ。遂に十月六日の夜の月も我等がストームの乱舞の様をもざりしならん。

十月七日

朝小屋を出て頂上に登り、空沼を見物し、真巖沼にてザルガニを取り昼飯の采に供す。

午後は帰途に着く。七時頃舎に到着す。

我等が不在の間、別に残留組も無事なりしと思う。行きし者は平山副舎長以下十二名なり。

十月八日

行幸記念日。

午後より公会堂に、谷川徹三氏らの講演あり。学校にては農工理学部に於いて学内開放を行ふ。

(三日間 望月)

十月九日

来る十一月三日の記念祭の行事で、各委員の発表あり。舎生大いに張り切る。(菅沼生)

十月十日 (木曜日) 晴

故郷のことどもが思はれる。大学構内の老樹にからまる蔦の紅いろと夕日にはえぬる〇は美しい。栗と柿と澄んだ空の内地の十月のあたたかさが浮ぶ。

本日は実専教練査閲があつた。予科三年は三里行軍し、後攻撃し出した出来と〇〇られたるこそめでたけれといふ訳である。

夕食後散策す。手稲の頂うすれゆきて〇光ほのかなり。東の空に木星が輝き始めた。

舎生一同、至極壮健なり。

太田 記

十月十一日（金曜日） 晴曇午後雨

予科の教練査閲の日である。珍しくも早朝から舎内が騒しい。出来栄は上々であったとの事、全く頼もしい限りだ。

望月君楓林原稿が集まらぬと嘆くこと。未だ出さぬ奴が居るとはチョウバツものだ。

十月十二日（土） 晴

平常は夢の中と云う頃、平山・柳川さん張切って査閲に出発。田村さん一人で猛く早く行く。

午後は竹澤・斎藤さん映画に。平山さん斥候長になり、自転車で活躍。（或いは「サボリ」か） 平日は学生の映画鑑賞禁止- - - とか喫茶店出入禁止- - - 禁止と此頃の学生はあらゆる娯楽からシャットアウトされている。我々の娯楽と云うものが滅亡するのか。吾々は若いんだ。大いに活躍すべし。あらゆる方面に。

小林君勉強、三村・太田さん原稿執筆、他。舎に残る人、三宅さんのみ。

今日が夕食の「エッセン」悪しとの評判紛々。土曜日の夜はのんびり過ぎゆく。 細田

十月十三日（日）

十三日の金曜日ならぬ日曜。皆んなはりきってとび出して行く。行く先は山へハイキングかさては又他の目的か。

齊藤・戸田両君と共に藻岩にのぼるべき出かけたが、たしなみもなく右へおりて農家の運動会をみてかへってきた。山根さんの率いる一隊は烏帽子へ行った。

未だ楓林の原稿集らぬらしい。櫓の音のときも某さんが一人もうれつにおくれて、文芸部弱い心臓をなやましたもんだが。これは何とかならぬものだろうか。一日ぐらいおくれるのはいいが、それ以上となるとどうも。部委は一方ならずめいわくするものである。

竹澤

十月十四日 晴

良い天気。安部能成の講演。他平凡。

Y・K

十月十五日 雨

予科は櫻星会三十周年記念式。學部は午後文化講義。満員であったとの事。明日僕の學生生活の（恐らくは）最後の試験がある。太田君又不調らしい。 玉山

十月十六日

櫻星会三十周年記念で映画の總見をなす。民族の祭典と、世紀の凱旋を見る。午後は円山で遊び会をなす。

十月十七日

秋晴れのすばらしいよい天気である。平山・山根両氏は、定山溪より銭函まで十里の道をハイキングする。他舎生は、円山・植物園・山鼻方面に出かける。

○明日の石狩行の用意がいそがしく行われる。

十月十八日 晴 【宮部先生との石狩への園遊会】

今日はいよいよ石狩行。朝から皆物凄く張り、八時半迄に観江バス乗場へ。着いたら、宮部先生始め、鈴木・山口の両氏が見えられた。今日出かけた人は総勢二十五人、即ち舎長宮部先生、先輩二人、舎生十七人、その他二人バスにて六里約一時間で石狩につく。それより鮭の網の引き上げを見学。一同それより記念写真を撮る。十一時十五分黙祈行ない、砂丘にテントをはり、食事の支度にかかる。昼食にはとりたての鮭と三平汁に舌鼓をうつ。三木兄、秘中の秘たる易により山口先輩を煙にまく。午後より運動会を行う。二人三脚、東西対抗箱たたき、学年対抗のムカデ競争等々。終了後エッセンを出して雑談する。かくして今日の楽しき、しかも意義深き見学兼園遊会を終る。四時頃歸舎す。(小林)

十月十九日(土) 【病気と健康について】

近頃は連日勉強するのが惜しい様な秋晴れが続く。去年よりは確かに暖かい様だ。レールの上の落葉の為、電車の車輪がスリップして異様な音を立てている。夕方の急行で、太田君が静養の為歸郷された。一ヶ月の予定とは言うものの、本當に一ヶ月位で元氣を取戻してくればよいが。卒業を目前に控えて実は氣の毒で残念な事だ。菅沼さんと見送りに行ったが、何とも言えず悲痛な氣持だった。病気になって始めて健康の有難さを知る前に、我々は常に健康に感謝しなければならない。

十月二十日(日)

小生旭川より歸れり。玉山氏試験終つて頗る暇と見える。この全体主義の世にもったいないことだ。夜オシルコが出た。「ル」の字が「ッ」の字でなくて良かった。この二三日大分温かい。

或る室で、女の子の「スキーズボン」と「モンペ」について論があつた由。いかい出来事だ。

諸先輩に封筒を出す。中味は○念祭り○○○○である。

戸田

十月廿一日 月曜日

可成り寒くなって来た。此の二三日特○然だ冬の○近に待っている証しだ。落葉もあわただしい。我先へと大地の古里へ歸って行く。雪の降らない前に、全部身軽になってしまうのだ。此後一ヶ月を出ず冬枯れの都となるのだ。その次に来るもの、白きもの、そ

れは雪だ。

学生課の努力で下宿に居る者は、多少の石炭の配布がされる様になった。その掲示が出ている。兎も角嬉しいニュースだ。石炭が無いではどうもこうもならん。此の点舎生は万歳だ。此の上御飯がなんとかなれば占めたもの。でも御時勢〇〇方なし。残飯組大恐怖。

三木〇〇

十月廿二日 火曜日 晴

ますます寒気身にせまって来た。本日から炭を入れて宜しいという訳で、大抵の室が豪勢に燃やしている。早くストーブが欲しい。札幌の寒さは、底冷えのせぬ寒さである。デンケンは防げぬ。今や秋もすぎんとする。老いて悔ゆる結果にならぬ様に努むるのが最上の道であるかも知れぬ。

河辺教雄

十月廿三日

冬近し。温度益々下がる。

室に火が入って漸く落ちついた生活が出来た様になった。

夜吹く風はこの頃、一寸肌にしみわたる。

Y・K

十月廿四日 木曜日

昨日の寒さに比して、今日は又幾分暖かさを取りもどしている。夜には雨が降って仕舞ったが、昨日の調子だと雪位降りそうだったのに。

今十月分の決算が終了した所である。一日の食費九拾銭。世は非常時なるを痛切に感ずる。漸し、食事部を始め各部の委員が熱心に仕事をして呉れるのには、誠に敬服する。此れならば、新体制も容易に施行出来るだろう。

夜の急行にて、田村氏歸舎。大日本ビールに首尾よく採用さる。彼の前途を大いに祝福しよう。

十月二十五日 金

後午より雨降る。皆ビショビショで帰へる。

食事部臨時会議。四時半より始まる。

寄宿舍食事部の改革運動愈々始まる。期待す。おばさんに抗議申し込む。

三村

十月二十六日 土曜日 【食事部改革運動】

食事部改革運動愈々激烈。

早朝から賄いの小母さん、食事部との〇に大論争あったそうよ。決算の日からいろいろもめてたのが爆発したらしい。

おばさんとの対人関係仲々難しいが、よく譲歩し合って協調的態度で進まねばならぬ。

夜、さすが土曜の夜らしくあちこちの部屋でだべりが讀く。第十一号室では、青年寄宿

舎第一回東西対抗将棋大会が開かれ、二時頃迄熱戦讀く。四号室では記念祭の余興に余念のない人たちもいる。

一日食費九十銭という高値に、舎生の関心が食事に向けられるは洵に喜ぶべき事。兎に角諸物価高騰の今日故、食事部という特定の人達のみ食事をまかすきでなく、全舎生一体となり進むべきである。外にきく新体制も我が舎に於いて、又新しく発足を見なくてはならぬ。

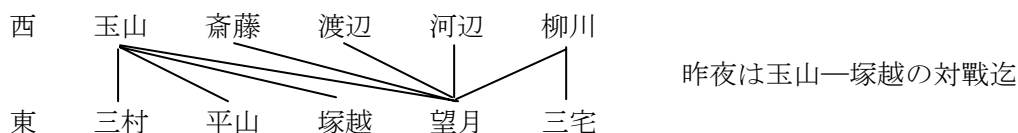
三宅

十月二十七日（日）

昨夜おそく迄だべった為か、今朝起きるのが皆おそい。柳川さんの十二時をトップに、三宅の十一時半、小生の十一時十五分 e t c。

二年工・医類軍旗祭に出席。分別をやったとか。御苦労様。

昨夜文藝部主催の将棋戦あり。



結局、三宅が柳川さんを切って東の勝。エッセン出るらしい。

十月二十八日（月） 晴

ものうい日

十月二十九日（火）

予科遠足。中島から真駒内迄、マラソンも有りしが、舎生諸君の中誰も出ず、いささか淋しかりし。

天候は恵まれ、非常に温かく正に小春日になりし。今日も先輩から、記念祭に出席出来ないとの状が来た。断はられても返事が来るのは嬉しいものだ。

十月三十日（水）

記念祭も近づく。今日予科の体育テストなり。上○十余名、中○五十余名、○○五十余名とか。

十月三十一日

昨日の体育テストで疲れる。皆ちこくす。今日も○けりだ。

十一月一日

いよいよ記念祭も近づく。農○の○○となる人○の○○で三時近くなり。

十一月二日 土曜日 晴 【記念祭の準備】

記念祭の色々な準備のため、前夜否今朝迄の奮闘で今朝は大部起きるのがおそい。
明日に記念祭を控へ、午後三年目その他の役員いそがしそう。僕と斎藤さん一緒に四丁目の方へ買ひ物に――。
なんとなく切迫した緊張した気分が○みなぎる。夜装飾部の方々食堂の飾り付けをする。
各學年の演出班猛練習。各役員殆ど外出す。深更に至る迄、話し聲がきこえる。
○○の待ちあぐんだものが来た喜びの聲が。 (細田)

十一月三日 (日曜) 【待望の四十三回記念祭】

皇紀二千六百年十一月三日は遂に来た。早朝より、菊花香る明治の佳節を壽ぐが如し、要綱燦として輝く。昨夜は余興練習其の他で深更迄起きてみたので、皆御寝坊。十時頃から仕度を始める。二時半には、伊藤・大谷両家の御令息を混へて十一名の来賓を迎へる。例の如く式は進行する。三村君の「吾が愛する青年寄宿舍に捧ぐる歌」は、喝采を博した。斎藤君の、非常時下に四十三回記念祭を迎へての感想では、同君の烈々たる愛舎心が覗えて嬉しい。奥田先生、加藤氏の藻岩山頂猥符の一節には皆笑はされた。五時より晚餐会に移る。費用の関係で、或は幾分貧弱な御馳走になるのではないかと懸念してみたが、饗應部諸君の努力により、盛大に終ることの出来たことは大いに感謝せねばならぬ。食後宮部先生は御疲れの御様子で、早く御帰りになった。八時頃迄、茶菓談話に時を過す。山口先生の将棋論に一同抱腹絶倒す。

九時から愈々待望の余興に入る。

プログラムを見ると堂々たる一流田舎芝居位には見える。

- 一. 舞台裏 (細田・戸田・三村・小林)
- 二. 来年の今頃 (山根・三木・塚越)
- 三. 恋 (河辺・望月・川又)
- 四. 亡兆 (小林・戸田・三村・斎藤)
- 五. 山ノロマンス
- 六. 来年ノ今頃ハ其ノ二 ―――

見物人は川口・阿部・福本の三君。伊藤家の坊チャン嬢チャン、マホメット二世、賄小母サン一族と云った所。十二時余興終了後、池○・柳川・戸田の寫真技士により各自思ひ思ひの扮装で記念撮影を行ふ。終ってリリーにて乾杯し、楽しき夢路に入ったのが午前一時。

出席来賓、宮部先生・賀藤・亀井・青木・鈴木・畑・時田・奥田・北村・山口・逢坂・前川の諸先輩。

夜に入り、冷雨ショボ降る。

十一月六日 晴

米大統領選挙の日。ルーズベルト三選を確信の由、夕刊に見えてゐる。柳川・平山・三宅・

塚越の諸君夕食後、記念祭写真引伸しのためプロパー暗室へ。

十一月七日

来年は来年はとて年をとり。自己の無能力。自己のアブノーマリティ。 竹沢

十一月八日 曇

朝から猛烈な寒気。ストーブをこひしがる声多し。夕方農場に前川氏の所へ行き、明日のアルバイトの道具を借りに行く。

山頂から初雪、かすかなちりの様なしろいものが〇〇〇〇とふる。 Y-K

十一月九日 曇 【記念祭後夜祭】

曇天でなほ寒し。午後農學部三年、健さん以外全舎生庭の炭ガラ・ゴミ等の片附けのアルバイトディーンストを行ふ。之は記念祭の宮部先生の御言葉によったものである。約二時間にて終了。夕食は畳を食堂に敷きつめて、記念祭慰勞スキ焼晚餐を行ふ。記念祭寄附豫想外に多かった為に、本日の肉類も豊富であった。菓子・林檎等を更に詰め込みながら、豫科一年より學部三年に至るまで各々隠し藝をひろうする。一年目の声畳、斉藤君の手品、川又君の映画説明、健さんの即興劇、平山君の「銀座の町——」等出色のもの多し。最後に寮歌を歌ひ、ストームで会を閉じた。 玉山

十一月十二日（火） 曇

舎の時計が八時三十五分にもなってから出掛けたが、学校についてみたらやっとなんた三十分になつてゐた。損をしたやうな得をしたやうな感じだった。雪の降りさうな曇天が續いてゐる。

昨日の雪も夕方迄には消えてしまった。陰鬱な空に裸のエルムがふるへてゐる。煙突が早く買えないものかなあ。

十一月十日（日） 曇 【紀元二千六百年式典の感慨】

今日は紀元二千六百年式典の当日にあたり、かしこくも天皇皇后陛下におかせられました。は、宮城前大広場に行幸啓あらせられた。しかして式場には全國より集ふ各代表が参列。先づ君が代によって式が始まり、近衛内閣總理大臣の壽詞奉上、それより天皇陛下かたじけなくも勅語を給ひ、最後に全國津々浦々にこだまする万歳によって式をとじた。紀元二千六百年〇といふ光輝ある年であらう。又我々日本民族がこの超非常時に於てむかへたこの年は、何と又意義深き記念すべき年であらう。我々一億同胞が一團となつて忠君愛國の至誠にもえ、天皇陛下を中心として、内敵外敵に對して全力をつくしてゐる時にむかへた時であるから、この年をして、より意義あらしめねばならぬ。武力・財力・政治外交國家總力において。しかして我々学生にとっては、專一に学理に徹する事であら

う。この時にあたり再びこの事を眞に心に期せざるを得ないのである。一年生のストームあり。

十一月十一日 月 晴

今日初雪があった。僕が北海道に来てはじめての雪である。皆速く雪が積もればいいな
あとの期待強し。 (小林)

十一月十二日 火 曇

今日からの予科の昼休が三十分短縮された。従って昼食は食べに歸れなくなったが、終
るのが早くなって夕食まで可成りの余裕が出来た。

砂糖屋今日も休みとのこと。漬物屋、市役所、砂糖屋などへ何回も足を運ぶ食事部委員
も中々楽ではない。

試験も近づいたので「午後八時以降だべるべからず」の掲示が出た。 H・S

十一月十三日 【労働の楽しさと役人への憤慨】

厄日。西洋流に言はなくなって、今日は厄日ですよ、なぜですって、わかるでせう。朝
から雨が降りそうだったのに、夕方まで降らなくて、降り出したらしとしとしと。
それに日記がたまってきたんですからね。あきれますよ。

夕方、平山御大・山根先生・小林閣下と共に豊平まで、丸太を取りに行きました。やっぱ
り或る目的に向って外のことを考えずに働くのが一番楽しいですね。東京のことも、女
のことも考えずに働く（大して働くにも這入らないですが）のが一番ゆかいです。今度
から働くことがあったら、何でも喜んで助けますよ。

青木先輩の口入でたちまちスレートのエントーが沢山入手できた様です。

この冬は、浮應の役人とむまはりだけがあたっかいとかで、ふんがいてたら道庁に居
る先輩が心配してくれたとは、変な気持ちに成っちゃいます。何だか裏を見た様な気が
します。役人よ、公平なれ。寒くても我慢します。

太田君歸舎。一同感激。太田君しっかりやってください。 (戸田 記)

休道他郷多苦辛 同胞有為自担親

紫扉暁出霜如雪 君汲川流我拾薪

○見年年開代新 研才磨智競謀身

翻愁習俗流浮薄 能庁忠誠有幾人

十一月十四日

大分寒くなって来たが今の所、雪の気配もない。本年は馬鹿に、お天道様も落ち付き過ぎてゐる。此の分で行くと冬体のスキーも何だか心細い。

舎生一同、ストーブの据付けで忙しさうだ。気の早い、peepinng Tom 君、本日中にストーブを燃すと、コツコツ ガチャガチャとやり居る。 三木 記

十一月十五日 金曜

今日から天下晴れてストーブを使用出来る事になった。舎生一同各自の部屋の設付けに大童。斎藤組、先陣を受けたまはり完成。土木組の若大将の若、称すべく。伊藤様より色々御世話になり多謝多謝。

十一月十六日 小雨

各室からは細々とストーブの煙が上がる。各自の設備○したもののだけに無心に嬉しいよ。午後七時より文武舎の音楽会が市公舎堂であった。大盛況裡に終る。

十一月十七日 曇

今日は幾分寒い、ここ四五日例年より暖い。学校に行ったほうがよい位つまらぬ日曜である。ストーブが燃えすぎて困る。嗚呼くさる哉。三木・塚越氏○立の音楽会へ。

10号 N・河辺

十一月十八日 晴

比較的気温低く、僅かに霜が降った。昨日柳川君の處から「からいも」一俵送って下さった。例年のことながら、今年は特に有難く思はれる。夜は段々冷えてくる。(田村)

十一月十九日

降りみ降らずみ霜月も半ばすぎると北田は暗い。

掲示板に「朝拍子木を叩く」可否が○○とる。つまらぬ事を考へる人もある。精勲企劃部にでも入ったらいいだろう。丁度女のパーマネットを禁止した様なものだ。余りに末梢的な事であろう。眠いのは生活○家である。ねむいときにはねむるべし。

十一月廿日

【世界と日本そして未来の指導者】

現在は丁度維新の様である。今度の没落階級は商人である。商人の持業問題は、実に国家の一大事である。非常時になって日本人の考へや其日暮しが分る。

ドイツは占領後三ヶ月にして、ポーランドに六十万人の○○を送り、和蘭の後○は完成に近づかんとする。

日本は占領十年にして満州移民は失敗に帰さんとし、満州工業の没落と共に三十億にならんとする投資もフイにならんとする情勢にある。

統制経済をして始めて犠牲者の事を考へる。“偉大なる政治家は事を為す前に考へるが、世は事をなしてから考へる”日本の政治の貧困性は宛も女性の知性と同じだ。国民の感情が今は熱狂してをるけれども、これがさめたら革命が起るに違いない。若き未来の指導者になる我々には、深く考へねばならぬ。

十一月廿一日（木） 雨後雪

朝、馬鹿に暖いと思って居たら、夕方は激変して雪が降った。併し、もう雪が降ってもよい時節だ。柳川君さへスキー靴に油を塗って、雪よ降れかしと待ちあぐんでゐる。舎は無事。 (平山)

十一月廿二日（金） 曇 【食事部の人々への感謝心】

本日、十一月の決算であり。一人当り、二十五円余り。いつもこの位ひであつて欲しいものだ。

斉藤君を始め、細田君、竹澤君達、食事委員の人々の努力が報いられたのだ。我々は深く感謝せねばならない。

食事部の人達に不平を言ふものがあつた。高ければ高いで不平を言ひ、安ければ安いで又何かと難癖をつける者に一度、食事部をやらせて見るが好い。

折角の努力に対するに、不平や文句をもって答へられては、食事の者があまりに可哀想だ。一番大切な役目で、一番人から難癖をつけられるのが食事部の人達だ。エンノシタノチカラモチだ。もっともっと深い感謝の念を彼等に対して持たねばならぬ。

—— 何につけても、感謝し満足する事の出来ない人は、気の毒だ —— (三村)

十一月二十三日（土） 曇 新嘗祭

休みの續いた二学期の最後の休日だけれども、利用價値の少ない休日だ。雪が降るでもなし、天氣が良くもないし、舎生時間をつぶすに苦勞したらしい。でも夜、札幌シンフォニー解散のコンツェルトがあつたので、時間つぶしにか？出かけた人多い。 (三宅)

十一月二十四日（日） 曇

相変わらず降るや降らずやの天氣が續く、不愉快なること甚しい。どうせ降るなら大雪がどっさり降ってしまへば良いのに。

寄宿舍平穩無事なれども午後いささか騒がしかった。共同生活をするのだから、自分を相当殺して行つてももらいたいものだ。かくいふ僕も大いに反省せねばならないが。

予科の試験も始まることだ。お互いに静かにつつしみあおう。 (塚越)

十一月二十五日（月） 曇

懶い（物憂い）日。

西園寺様が死んだとの事。何だか日本が哀れむ様な思ひがする。日本を知らない青年はここにも居る。

十一月二十六日（火） 【お婆さんと舎生活の心得】

入院中だった、アッチャン（エンブリタとか？）かへる。アッチャンのお母さんも嬉しいだろう。又大お婆さんもうれしいだろうし、又安心したろう。子供等もお互ひ、うれしがってゐる様だ。お婆さんは、僕等にとっては被傭員だ。お婆さんも僕等も同じ釜の飯を食って居る。僕等とお婆さん等六人で一世帯を作って、青年寄宿舍といふ同じ屋根の下で生活してゐる。お婆さん等は少し多すぎると思つてか遠慮する。それで皆さんに御厄介になってゐるんだからと、それだけ僕等の為にと――。

三年又は六年の舎生活を終えた下宿生活に入ると何故に僕等は素人下宿を○するか。下宿屋でない下宿を探す心を持って、全舎生はお婆さん等と共に同じ心になって生活して行きませんか！

舎用をよくやるからといって、自分は舎で一番大きな○物と思ふは大間違い。そんな心であれば何もそんな人にやってもらはなくても、その舎生以外は誰でもやる。平生黙つてゐても、此の舎に関係している以上は皆舎を思つて居る。舎の行事をやるにも實際、当事者だけは動き廻つてやつてゐるんじゃない。皆の黙々の内の援助を感謝しながら走り廻るんだ。又、そうゆう心を持って活動されれば、黙々の中にも感謝をしながらも如何なる援助をもおしまない。お互ひ、ダンケ・ダンケで同じ心になって生活して行きませんか！

坐○荘の大人に、僕等の時間割を知らせてあげたかつた。国葬は五日（木曜）とか、六日（金曜）は僕等のベストメンバーだから。これこそほんとに、かへすがへすも残念といふ所。失吉○謝。

菅沼生

十一月廿七日（水）

今日も良い天気、寒いが晴れてゐる。雪は積らない。三木君、具合悪く臥床静養中。其の外舎生元気である。

（太田記）

全舎生の友情に答ふ

速く癒えよ 舎兄（トモ）を案じて求め来る 君が玉は 友情が玉。
ゲツと来る 酸き物よ しばし待て 看病（セワ）に疲れて友は良睡す。
三時打ち 我れ寝返れば 君 未だ眼をさまし居るか 我 如何にせん。
友の来て 常に威す代物は 我の憎める 蠅か 盲か。
腹痛に君が ダベリは かしがまし 君許しませ 今宵一喝。

（二十八日病床にて）

十一月二十八日 木曜日 曇

今日もぱっとしない天気。北國特有の天気か？

西の連峯も一日と白さが目立ち、大倉山シャンツェのスロープには綺麗に白布が垂れた様に積ってゐる。

予科の試験の日が発表されたとか。いよいよ来るものが来た。

三木さん、今日は晴れやかな顔をしてゐる。何かに取りつかれた様な顔をしてゐた昨日とは打って変わった。回復だ。回復だ。出発だ。

先日迄、食事の事・学校の事・故郷の事が色々心をみだし落ちついた気持ちがしなかったが、此の頃は大部落ち附いてきた。

—— 真の苦しみ知らざる者には、真の楽しみを獲得し得ず ——

来る楽しみ・スキーの楽しみを夢に画きつつ、その前に横たはる難関・苦しみに突進しよう。諸兄もどうぞ。 — ホンダ —

十一月二十九日 金曜日 曇時々雨 【舎生としてのチームワークの必要性】

珍しく暖気を覚ゆるも、沈鬱なる曇天なり。平山君と共に三時限四時限目をサボって、白石病院に三木君を供ひ診察をして貰うと、黄疸との診断なり。本人至って元気なるも食事・注射等の関係上、直ちに入院の手続きを取る。試験を目前に控えて病魔の犯す所となる。彼の胸中や察するに余りあり。而も毫も其の苦衷をば色に表さずして、豪快なる笑声を以って見舞へる人々を應待する。誠に、男子中の男子と云ふべし。

予科生諸君愈々猛勉を開始す。諸君吾々舎生は一つのチームだ。吾がチームは「人生」なる試合に望まむとして、今猛修練中なのだ。勝たんがためには寸分の隙間無きチームワークが必要だ。それがためには自己を犠牲にしても構はぬ。チーム全体としての勝利が目的だ。チーム全体の勝利は、即ちメンバー各自の勝利である。

諸君よ、諸君等各自の行動に対して下される讃辞・批評・悪罵・非難 - - は總て『青年寄宿舎』が甘受するのである。諸君の先輩の顔に泥を塗る勿れ。そして諸君の同胞を愛せよ。 乱言暴言多謝 山ネ

十一月三十日 (土) 小雨後曇

平穩無事な一日だった。砂糖も十五斤は入ったし、干うどんも買へそう出し、試験を控へて、食事の方はどうやら異常なくやってゆけそうだ。

汽笛を聞くと、試験なんかほったらかして歸省しちまひたい様な気になる。

人間の内には誠心誠意ぶつかっていても、それに対するに唯嘲笑と侮蔑をもってするものもないわけではない。 竹沢

十二月一日 寒冷厳し

愈々今年も十二月に入った。白馬の隙のたとへ。年をとるにつれて、日の立つのが早い

様に思へてならぬ。去年よりも今年と次第に時日の歩みは速度を増す様に感じる。時に外は粉雪である。今迄にない寒さであった。パン屋は第一日曜と第三日曜は定休日との事。取りに行った身は馬鹿を見る。 Y・K

十二月二日 月 曇

明日夜月次會を行ふ事となった。委員學部三年三名。細田君のカンダーハーガンツおさへる。例年は十一月の末には1回位滑れる筈なのに、今年は雪が降らない。 玉喫茶店等で新体制、三国同盟の批判。国内物資の不足等の話をするのは禁物だそうだ。雑誌等を見ても、段々本当の事が分からなくなったような気がする。もっとも、今困って居るのは日本のみではない。米・ソを除く世界各國ともに正に未曾有の國難と戦って居る。この中であって、日本の進むべき道、前途漠として豫想だにつかないのも心もとない。従って僕等は一体何をすべきかと云ふ事も漠として分からない。ただ時の流れに従うのみ。

十二月三日 火 曇 【月次会で舎改築決定】

朝起きたら雪が三寸程積もってみました。もっと澤山降ってくればいいのにと思ひながら学校に急いだら、道がぬかってあまりよい心持ではなかった。二十歳未満の方々、体力検査を受け、おかげで授業は一時間ブランクになった。夜は八時頃から月次会、学部の方の委員で座談的に舎改築趣意書の相談をする。宮部先生は微風邪で欠席したが、先輩方の御努力により改築進軍の第一歩を踏み出した。どうしても実現するように頑張っていたのだから又我々も頑張ろう。平戸先生の帰満旅行談から満州の話に花が咲く。十時閉会。

十二月四日 水 雪

今日学校へ行ったら、明日は西園寺公國葬のためその勲功を偲んで休業するとの掲示があった。今迄授業があるとの話だったので、尚更嬉しかった。豫科の人達はいよいよ戦時体制に入った様だ。僕ばかりぼんやりして居るのは、はずかしい様だがどうする事も出来ないからせめて静肅にでもしてゐよう。では諸君の奮闘をまつ。 八号 K

十二月五日 木 【西園寺公の国葬と賄人への不満】

幕末以来三朝に仕へ、一島國であった日本の興隆に偉大な貢献をなし、不朽の名を青史に止めた、故西園寺公の國葬は今日日比谷公園広場に於いて、厳肅の中にも、簡素に執行された。公こそは真に「日本」の姿と成長を表裏からつつみかくしなく知り盡し、その発展に多大の功績を残した偉大なる生涯の人であって、同じ國葬でも先の東郷元帥とは、比較にならぬ程意義の深い國葬である。

公の偉大なる勲功を偲んで大学は休み。試験を目前に控へて予科生は大部張り切っているが、僕はどういふものか少しも能率が上らぬ。去年の今頃はもう快適にスキーが出来たのに。と雪ばかりが氣になって落着かぬ。

竹沢君が吹雪の中を市役所と漬物屋へ行ってくれた。お婆さんの事を云々するより、先ず委員の者がもっと走り廻れと言ふ人もゐる様だが、自分達の事を言つて變ではあるが、現に昨日も市役所へ、更に明日も市役所と銀嶺荘へ行くと云ふ様に、我々としては相當走り廻っている積りである。そこへ賄に定員以上の人が来て、而も能率が上らず、それ等の人に対して米や砂糖の配給もない。従つて食費のかさむ割合に質も量も向上出来ないのであるから、自然云々せざるを得なくなってくる。

試験がいよいよ近づいたので食事の質もそれと共に向上させて諸兄に物凄いエネルギーを注ぎ込めんと我々は張切っている。

悠然と舟遊びをして、氣にも掛けなかつた水平線の彼方の小さな黒雲が、俄かに我々の頭上を覆ひ始め、慌てて艀をこいで岸へ逃げ出しつつある様な感じである。互いに他人の勉學や睡眠を妨げぬ様に注意して共に此の嵐を切り抜けよう。 (斎藤)

追記

我々は勿論あの安い給料で働いてくれるお婆さんに感謝はしてゐる。しかし、彼等のやり方の中には様々の不可解な点や明瞭な不誠実な点が色々と看取される。我々としてはその事実をいくらでも指摘することが出来る。唯その生活まで監視する事は出来ないから、程度を確める事が出来ないだけであつて、結局その問題は賄人の誠意の問題に歸するのみである。我々はかくの如き賄人をして、あの食費でやってくれた竹沢・細田両君に深く感謝する。

十二月六日 【菅沼氏への反論：舎生活での気概】

十一月二十六日の菅沼氏の記事には反対だ。下宿屋と寄宿舍の比較の仕方は納得が行かぬ。舎に生活すること未だ七ヶ月ばかり、素人下宿○徑けんではあるが素人下宿と寄宿舍とは意味が異つて居るはずだ。それ位のことは菅沼氏もわかるだろう。我々は寄宿舍の下宿化を要望しない。我々は獨立者ではない、父母の汗水流して働いた尊い金によって月々を送る者である。その我々が二十人あたりに、子供もまぜて七人の者を養つて行く事は、可也り荷が勝ちすぎて居ると思ふ。加えて所謂インディアンの舎に對する經濟感念の不足、衛生思想の無いこと。例へば、直して用ひる事の出来るほうきを直さずにいる事。子供が手を突っ込んで水をくみ出し、のみながらこぼしたその水が又おちこんだ桶の水をやかんに入れて、我々の飲用に用ひる事○。又、日常生活に於ける不誠意。アンパン親子の引っぱりこみ方の悪らつき（僕はアンパン一族が来てから舎の能率の向上を認め○ない。）等に我々が理想として行こうとする所と大きなへだたりを感じる。それを指摘して改めなければ、意見の對立なり喧嘩なりが成立する。これは行ふべき喧嘩である。

又「舎用を良くやるから云々」の所で、そう菅沼氏が信じるなら、勉強のかたはら四方八方飛びまはって居る食事部の者に良く「きっと飛びまはれ」と言へたと思ふ。自分は食事部であるが故に、自分の仕事だけは完全にやっつけてのけると言ふだけの自信を持つことは必要だと思ふ。自信とうぬぼれは、全然ちがふ。自分は何も出来ぬ者だと思つて居る者に骨のある仕事が出来てたまるものか。自ら以って、一口の重き一世の重きに住む位の氣概があつても良からう。「舎に生活するからは、自分が舎をリードして行こう」位の氣概があつても良からう。

自分のことは棚に上げて心苦しいが、舎を思つて居れば自分のことはどうでも良いと言ふものではあるまい。食事部の者に走りまはれと言ふまへに、自分の室にたく石炭を同室の者をして、他の室々迄はしないでも良い様にすべきだ。他人の世話焼もいいが、自分のことは出来るだけ完全にしたいものだと思ふ。食事部の人は自分では言いにくいだろうから、上級生と心苦しいが敢えて書いた次第である。

今日は平穩な一日、エルムの梢に八日位の月が淨い。北国の星空は豪華である。試験の番付け発表あり。

戸田 記

十二月七日 土曜 【三木君の退院と菅沼氏問題の議論続く】

生暖かいような人の気を弛める天候である。本日朝三木君、一週間の病院生活を終へて歸舎す。出来るだけ頑張つて試験をうけるとは中々すごい。健さんが悠々たる所を見せて、一二年生に数学を教へるとの掲示あり。「難問で苦しめて下さい」とは、自己を苦しめて修養する宗教徒の様だ。文藝部で優秀なノートを集めておいたら、真に合理的である。雪の感じもまだまだ味はへぬ。今年は案外暖かい。菅沼氏の〇九号室で激発してゐる。〇を超越せざれば喧嘩の起るのは無理もない。隅から隅まで監視するとはスケールの小さい人間である。もっと大きな世界に住み得る人間であれ。周囲の人間によって、神経をとがされるとは真にデカダンの的である。宜しく宇宙を五尺幾寸かの身体の中に蔵すべし。

十号 河辺

十二月八日（日） 【議論への戒め】

今日は比較的氣温が暖かい。學期試験が近づいて予科生は忙しそうである。大いに頑張つてくれ。

何日ぶりに廻つて来た日記を見て居ると、各人の個性なりいつわらない気持ちなりがあらわれて居て仲々面白い。

色々意思表示も見受けられる。何事でも悪い事は改め、良いところは伸ばす様、努力すべきは当然であつて、この点について議論するのは大いによい。併し議論はあくまで冷静にして激するところなく、些細な事を以つて全体を即断したり、ことのはをとりへて、人間全体を推す様なことはさくべきである。

尚ほ何事にせよ一度び仕事を任せたら一寸したへまや、氣にくわぬ事が起きて、ゆつたりした気持ちで見守つて居てやると云ふ度量がほしい。

夜がふけると段々冷え来る。

お隣から計算器の「りん」が聞えて来るので、一々めんどうくさい計算を紙に書いてやるのが馬鹿らしくなった。

十一号 田村

十二月九日

寒風肌をつく。紀元二千六百年、其うして僕の最後の学生生活の年を、かくてくれてゆく。

Y

十二月十日（火） 雪未だ降らず

舎内一同無事。予科・医専の諸生徒、試験勉強に大奮闘。恙なく終了せんことを祈る。夜、鈴木限正先生来舎。特別室にて余等と共に、寄宿舍改築に就いての相談を行ふ。舎の先輩と云ふことだけで、かくも熱心に舎の為に御努力下さる先生に対し、感謝感激に堪へず。舎生は深く此の御恩真心に止むべし。

T・H

十二月十一日（水）

勉強をして居るためか、舎内は実に静かである。

ストーブを燃やすようになったら、天井裏に急に鼠が集り出した。飼料不足の折柄、一号室のストック米でも食べられたら大変だ。余は本日猫を借りて来た。鼠を取らせるためである。

舎生諸君よ、少しの間我慢して猫を可愛がってやって呉れ。もう一匹、鼠を取ったんだよ。

T・H

十二月十二日（木）晴

夜の間十糎ばかりの雪が降った。だが未だ根雪になりそうもない。明日は、細田君解剖の試験が有ると云ふ。大いに頑張ってやって呉れ。

予科生に煙筒の配給が有ったそうだ。今頃は、学校も学問のみを教へて居られなくなった。此んな時世が百年続いたら、学校はデパート化するだろう。

T・H

十二月十三日 金曜日 曇

空から大分寒い。昨日の雪がまだ溶けやらず。

明日から予科生は試験が始まる。今日は、臨時休みで皆朝から張切って、終日勉強してゐる。試験の成功を祈る。

(三村)

十二月十四日 土 晴

予科、試験第一日終わる。試験終わってほっとして歸舎して、燃えぬながらもストーブをいじくり廻っているのものんびりして楽しいもの。明日は又お休み。昼飯後、一年目

の諸君スキーをやっているのをたまらなくなつてか、或いは先輩面をしたくてかスキーを俺もやる。今シーズンの初滑り、いたく乗り心地よい。平地の上だからだろう。でも雪少なくてスキーに石や炭がひっかかって、カリカリいって気持悪くて直ぐやめた。

(午後 三村記)

凜烈たる寒波襲来。今朝の寒さは、本年度最高ならん。一日中寒さ続く。夜、窓ガラスに霜がついてるが雪は降らん。

試験終わってやれやれか。何だか今から心配だ。 (夜) 三宅 勝

十二月十五日 日 曇

試験亦快ならずや。時に「暗記すること」をやると疲れる。

雪よ降れ降れ、コンデを埋むる迄。大日向村「祖国に告ぐ」は面白かったそうです。

塚越

十二月十六日

雪がそぼそぼ降って来た。灰色のノートに、雪が降っても別に興が昂じない。悲喜交々生ずる——大概悲しみ大だが——試験も今日で二日目が終わる。明日の三日目の準備にとりかかる。黒板に「世の中に絶へてコンデの無かりせば」と細田君が書いて置いた。予科生よ、気を大きくしなさい。細田君も余り心配しない方がよいよ。落第つて滅多にするものではない。然し、落第を怖れて勉強する様では駄目である。コンデをとったときの慰めの言葉である。

要は“青年よ大志あれ”である。試験は些事である。試験を些事とすると、これなくしては世間を過ごせないか。亦反対に些細なことであるからは、○つてもなくても同じだとも思へる。

こんな詰らない試験にコンデをとったと云って悲しんだのも情けないが、コンデをとつても情けない。してみると、試験たるや世に最も必要にして缺るべからざるものであるわい。 ——理想は現実に非ず。

十二月十七日

私の書き方のまずさと不充分さにより、諸君の純朴な誤解を招いたと思う。何時か皆と話し合つて見たい。ひじょうな考え違いをした人があるらしい。僕はそんな悪い人間とみられてもよいが他人に対して同じく見ようとしなないである事をのぞむ。彼に幸いあれ。一度話し合ひましょう。話せばお互いにわかるでしょう。 菅沼生

十二月十八日 晴 暖一

冬とは言え雪は唯残骸を留むのみである。舎のスキーヤー皆、空を仰ぎて嘆くこと嘆く

こと――。

予科生猛勉。試験は後二日の由、健闘を祈る。

試験後のスキー行きのプランににぎわうもの、歸省するための切符買い皆楽しそうである。舎生一同健在。

今夜も良い月だ。窓よりさかけき光訪れ〇〇〇。

近頃は内地の晩秋を思わせる。 一枯れ枝に鳥とまりけり秋の暮れ― 太田記

十二月十九日 木曜日

一大ニュース。舎の話題を賑わす。

柳川さん新体制に促應してかつ、美髪を散髪す。惜しきかな。

幾多の話題を生んだだろう又、柳川さんにとっても実に感慨の深いだろう長髪が一寸の間に。

もう當分髪をのぼした柳川さんを見れないと思ふと一寸淋しく又良く見て置けばよかつたと思ふ。事實は單に髪を三寸切っただけであるが、その一・二寸の中には様々な思い出があった事だろう。

でもその裏に確固たる何事かなさんとする意志が讀とられてうれしい。試験も予科は明日僕は明後日で終わる。何時も考へる事だが。

「人間の中には相當の準備期間があるにもかかわらず、利用せず事急に迫ってからあわて出し、双の上を渡る様な危険も冒し、何とか「ケリ」をつけてそれで後になってから自分にはどんな事がぶつかっても平気だ。何とかなる、出来ると思ひ込んでいるものだ。試験の終わるのは臨んでの感想。

試験も後僅かなせいか、のんびりしてゐる。

此の頃、何だか自分で自分がわからなくなって来た。自分の理想と現実とのあまりの間隔の大きいものにも自分でどうにもならない焦燥と矛盾を感ずる。又世の中って随分六ヶ難しつと云ふ事も、わかりかけて来た様な気がする。

「櫓の音」の原稿を募集する旨の掲示が出た。年三回発行する中三冊目だからもう一年に及ぼうとしてゐるのか早いものだ。

勿論そうだ。あと二日で二冬期も終わるのだから。

舎を愛する心は誰にもある筈。もっと大きい立場からやって行きませう。他言妄言多謝。

(細田)

十二月二十日 (金) 曇

道路のプールは、かんかんに氷結。道廳の池では子供のスケートに興ずるも見られる。

予科試験終了。細田君のみ淋しく明日に備へて試験勉強。夜沢算あり。

十二月廿一日 (土)

離別コンパ有り。夜おそく迄、スキーに行く者は準備に忙しそうだった。 (Y・K)

十二月廿三日 月曜

平山・柳川さん今朝七時で帰省されました。十時とばかり思っで見送って行きましたが、すみませんでした。

河辺君は十時で帰省。平山・柳川さん、旨く願いますよ。

十二月廿四日 火曜日 【青年寄宿舍山岳部山スキー体験と楽しさ】

山根リーダーを頭とする青年寄宿舍山岳部員（此の名前も今回無意根で命名した許り）一全元気に帰札。果してスキーがやれるかやれぬかの様よ〇〇い様子のサッポロを離れたのが二十二日の朝、定鉄沿線も札幌とは少しも変らぬ積雪状態なので大いにくさる。しかし山に入る夜には積雪状態も良く、ヒュッテに達する附近ではどうやらスキーが滑れるので、ゾンメル迄もって行った僕等にとっては案外積雪状態に大いに氣をよくした。殊に二日目の夜頃からは雪さへ降り出し、三日目のスキーは快適に楽しめて、シーズン最初のスキーを満喫して下山した。不幸、悪天候の為め頂上を見極める事が出来なかったが、今迄僕の行った山の中では最もスゴイ山の様に思った。殊に頂上へ上り口のゲレンデは、札幌近郊随一の山の様に思ふ。

二日目の山小屋の生活も又楽しかりしよ。案内の労をとられ終始御世話になった、山根リーダーに感謝して筆をおく。

十二月二十五日 水曜日 クリスマス 【正月帰省での寄宿舍の寂しさ】

舎に残ってる人、全部で自分も雑へて七人。此んなに遅く迄、寄宿舍に残ってゐた事のない小生に、舎生の半ば帰省した舎は、寂しいの一言につきる様に思ふ。ひっそりした舎に残ってゐるは、随分寂しいものだ。心は矢の如く郷里の方へせかれる。今晚にも帰省しようと思ふ。

札幌のにもちらほら雪が降り出した。張り切ってた舎生が帰るのを待ってた様にふり出したから皮肉なものだ。しかし舎宿の連中も、恐らくこの雪で快適なスキーを楽しんでゐると思ふ。

夜には、菅沼帰省。讀いて小生も十一時半で帰省します。

三宅 記

十二月二十六日 木曜日 晴後曇

朝少しく青空が見えてゐた。塚越君・健さん嬉々として一路故郷へと眞っしぐら。ひがめひがめ大いにひがめ。川又君荷造り、田村君論文で急しそう。

午後、砂糖配給を受けに行く。十五斤である。夜川又君帰省す。平山君・柳川君よりの吉報を待つも未だ来らず。夜、池谷氏来て寫真引伸しを行ふ。五号室煙突掃除。

十二月二十七日 金曜日 晴 午後雪に変わる

昨日の晴天で大分解けて、或いは之れも根雪にならぬのではないかとさへ思はれた雪も、午後晴れた空より突如降り出した霏々たる雪で、忽ち三寸余りの積雪を見、畜産前のスキー場は若きスキーヤーで賑はった。賄の居候小母さん（エンブリオのムッター）函館に帰る。松竹の名映画週間第二日目“暖流”を見に行く。三木も来てみた。今日一日中は、遂にストーブ無しで過した。 (山根)

十二月二十八日 晴後曇 寒気骨身に泌み通るばかり

午前十時田村君帰省。たうたう三木・山根の二君のみとなる。六萬五千円の夢未だ実現せず。焦燥すること甚し。夜に入りて降雪をみる。

十二月廿九日 【映画「木石」観賞による感動】

今日も雪空らしいが一向降らない。山根兄と二人でスキーの話しばかりしてゐる。岩見沢の附近は、一夜に五尺も積った由であるが、札幌はどうした事か。

荒井山のゲレンデは今の所全然駄目。土が出てゐる所もある。夕方、十勝組・ニセコ組無事歸舎。中田・三村君中々上達したらしい。當るべからずの氣焰を上げてゐる。羨しき次第。三村君、ニセコのレースを四位を得たとの由。一年組、將に脅威だ。

山根兄と夜は木石を觀に松竹まで。一昨日は暖流。此の一週間映画観賞に余念無し。船山聖一の原作だが、やはり脚色して或る程度まで成功してゐる。小生は二度目の観賞なので、或る種の感傷（感激と云った方が近いかもしれないが）にひたりながら、夢ならぬ現実の問題として、自分の追憶にこの木石なる追川初なる人物を當てはめて見た。然し、何等の効果もなかった。余りにも追川の犠牲的精神は清きさ過ぎた師弟の愛を遙かに超えた。追川は私淑否敬慕する恩師、相島博士（？）の助手として彼の病院に勤めてゐたのであるが、博士の不倫の子を博士を思慕する余り自己の私生児として二十年余育てて来たのだ。（自己の娘、襟子を伴い、同僚の陰口にも耳をかさず、果ては自己迄も欺かうと努力するのだ。此れが尊敬する博士への愛情の表現が、面して御恩報じなのか。ああ余りにも純にして清なる彼女、追川の性格には頭の下がるのを禁じ得なかった。然し反面何だかもどかしく、齒痒さと仕方がない気持ちに駆られて仕方がなかった。

四十年の短き一生を捧げるだけの強さ、熱烈な追川でありながら何故一言半句の意思表示をも汚さる対して為し能はざりしか。此れが小説だと云ってしまへばそれまでだが、余りにも人生の悲劇の深刻さに胸の痛くなるのが覺えた。自分を私生児の母として認め、不義の母として襟子の恋愛問題に躍起となり、自分の二の舞を踏ませまいとする辺り、一應は肯ける事は出来るが、何だか割切れない気持ちががして仕方がなかった。兎に角、あれだけの大役を赤木蘭子なる女優の〇格俳優としての成功に絶大な敬意を表したい。大体に於いて此の映画は、主役が追川初、襟子若き医士（片桐）となつてゐるが、追川の名演技に他の二人の影は淡く感ぜられた。赤木蘭子なくしては此の映画は芸術的価値は

可成り割引されるので無いかとさへ思はれる。此の様な悲劇の子供（襟子）にはもう少し陰影のある俗に云ふ色気の感ぜられない女優を配すべきではなかったか。木暮の表情は余りにもエロティックに過ぎて好感が持てない。但し僕の云ふのは「木石」なる映画の範囲に於いてである。兎もあれ大船流の甘い感傷に終始せずに、観賞出来るのは何より嬉しい。特に初と終に出て来る山のシーンが美しく且つ効果的だ。終に俗っぽい新婚旅行の物而等が出されたら、それこそぶち破だったのだから。近来の名作。

諸君是非一度観賞されん事をお勧めするよ。

広

十二月三十日 別に異常なし

夜、塚さんより帰郷第一報あり。「寄宿舍新築の件、大体本格的に実現されるらしい」との情報あり。全舎生の一員として、感謝に恩へず。平山・柳川先輩の御骨折に满满的の謝意を表する次第なり。

広

十二月三十一日 【年の暮れの過ごし方】

二千六百年も今日一日。何となく寂しい気持ちがある。

午前中、山根さん明日の食物買いに町に出て、大きなフロシキ包みをもって帰へる。お昼から、僕が櫓を引いてお米を取りに行く。

一風呂浴びて山根さんと再び町へ菓子を買に出た。三越で三木さんに出会う。

年の暮れの如何にもあわただしい様子。行く人々のせはしげな足どり店頭の人ばかり。大きな荷物をもって右往左往する人。救世團の社會鍋とラッパの音が毎日の感じをそそる。

夜、年越しの馳走を食って、町に活動を見に行く。幻の馬車、歌ふ徳さん、文化映画、ニュース、暮れの割りに込んでゐない。

十時頃帰舎して、ソバならずシルコを食ふ。ストーブを囲んで駄べる。又楽しい。外は雪がチラホラ。

電車は夜通し満員のお客を乗せて、札幌神社へ運ぶ。一時に就床。三木さん望月さんは、札幌神社へ、ハオリ・ハカマ・リリシク参拝に出掛ける。僕と山根さんは、御免こうむって、夢の中へ。明日は元旦。 — 二千六百年 —

「四時頃、三木・望月両君歸舎せるとの由。かなり雪が降った様。大変な人出だったとのこと。三木さん、下駄を無くして神社から舎までマラソン。」